浄土江遺跡

宮崎市文化財調査報告書

第 6 集

1981

宮崎市教育委員会

宮崎市教育委員会
受
56. 5. 29
付
第191

序

浄土江遺跡は、宮崎市街地の東部、国鉄宮崎駅の東に接する旧宮崎刑務所構内に発見されたものであります。この遺跡を含む東部市街地は、近年、急激な都市化の様相を呈しているところでもあり、昭和51年6月の宮崎刑務所移転に伴って、なお一層の再開発が進められているところでもあります。

遺跡の主体部を包含する刑務所跡地につきましては、宮崎市が国より土地の払い下げと借地によって、今後、文化の森構想のもとに公園や各種文化施設を建設する計画がもたれております。

今回の調査は、こうした計画に先だっての調査となり、宮崎市教育委員会が主体となって昭和52年から54年にかけて第3次発掘調査まで実施したものであります。

調査では、当時の建造物の存在した中央部及び東部におきましては、遺跡の保存状態が悪い状況にありましたが、西部におきましては、包含層が深くなることもあって、住居跡や溝状遺構の検出がみられました。検出された住居跡は25基を数え、古墳時代から奈良時代にかかる生活跡であることが判り、宮崎県内におきましても、この時代の生活跡の調査は初めてのことでありました。

また、第2次発掘調査におきまして検出いたしました良好な住居跡及び溝状遺構につきましては、遺構内に砂を埋め、その上部に埋土するといった保存策も構じております。

浄土江遺跡の発掘調査は、宮崎市単独の調査であって、調査面積が2,000㎡に及ぶ、かってない発掘調査となりました。調査を終了してみますと反省点が多いことを痛感させられるところであります。

しかし、市街地の中で、これだけ広面積の発掘調査区を確保し、住居跡等の検出に努められたことは、意義深いものと考えます。

本報告書が、関係各位の参考となるとともに、文化財保護の一助となれば幸いです。

この報告書刊行にいたるまでに、発掘調査はもとより、資料整理、編集等にあたられた各位に深甚の謝意を表します。

昭和56年3月31日

宮崎市教育長　黒　木　定　彌

例　　言

1. 本書は、宮崎市教育委員会が、昭和52年８月16日から８月26日（第１次調査）、昭和53年11月28日から12月28日（第２次調査）、昭和54年10月15日から11月３日（第３次調査）まで実施した、浄土江遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査には、田中茂、石川恒太郎、茂山護、野間重孝、北郷泰道があたり、資料整理には、野間重孝、北郷泰道があたった。
3. 本文の執筆は、野間重孝があたった。
4. 挿図の実測及びトレスについては、北郷泰道が行ない、一部、野間重孝が行なった。
5. 写真撮影は、野間重孝が行なった。
6. 本書の編集は、野間重孝が行なった。
7. 本書における住居跡の名称番号については、検出の早かったものから順序に番号を振ったので、統一性を欠いた点がある。また、第１次調査検出住居跡を 100番代、第２次調査検出住居跡を 200 番代、第３次調査検出住居跡を 300 番代としている。
8. 本書における出土遺物は、宮崎市教育委員会が保管している。

昭和56年３月

宮　崎　市　教　育　委　員　会

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　調査の経過と概要……3
Ⅳ　第１次発掘調査……5
1.　A－２区調査区……5
(1)　A－２区の層位……5
(2)　A－２区の遺構（101号、102号、103号住居跡）……5
(3)　A－２区出土遺物……6
2.　E区（104号、105号住居跡）……7
3.　B、C、E区出土遺物……7
4.　F区（１～３トレンチ）……8
(1)　F区の層位……8
(2)　F－１区出土遺物……8
(3)　F－３区の遺構（106号住居跡）……8
Ⅴ　第２次発掘調査……12
1.　層　位……12
2.　住居跡と出土遺物（201号～210号住居跡）……12
3.　溝状遺構（１号～10号溝）……27
4.　溝状遺構出土遺物及びその他の出土遺物……28
5.　土層観察トレンチと出土遺物……29
Ⅵ　第３次発掘調査……30
1.　層位及び住居跡内の土層推積状況……30
2.　住居跡と出土遺物（301号～309号住居跡）……31
3.　溝状遺構と出土遺物……36
(1)　溝状遺構（９号～15号溝）……36
(2)　溝状遺構出土遺物……37
Ⅶ　ま　と　め……40
1.　住 居 跡……40
2.　溝状遺構……42
3.　炉跡及び竈……42

挿図目次

第１図　浄土江遺跡位置図……2
第２図　浄土江遺跡発掘調査区位置図……4
第３図　浄土江遺跡Ａ－２区東壁土層図……5
第４図　浄土江遺跡Ａ－２区遺構図（101号～103号住居跡）……5
第５図　Ａ区出土土器実測図……6
第６図　浄土江遺跡Ｅ区遺構図（104号、105号住居跡）西壁土層図……7
第７図　Ｂ、Ｃ、Ｅ区出土土器実測図……8
第８図　Ｆ－１区、Ｆ－２区出土土器実測図……9
第９図　浄土江遺跡Ｆ－３区遺構図（106号住居跡）土層図……9
第10図　Ｆ－３区出土土器実測図……10
第11図　浄土江遺跡202号住居跡周辺土層図……12
第12図　201号住居跡実測図―同炉跡実測図……13
第13図　201号住居跡出土土器実測図……14
第14図　201号住居跡出土石器実測図……14
第15図　202号、203号住居跡実測図……15
第16図　202号住居跡出土土器実測図……16
第17図　202号住居跡出土土器実測図……16
第18図　203号住居跡出土遺物実測図……17
第19図　204号住居跡実測図……18
第20図　204号住居跡出土土器実測図……18
第21図　205号、209号住居跡実測図……19
第22図　205号住居跡出土遺物実測図……20
第23図　206号住居跡実測図（206号住居跡出土土器実測図）……21
第24図　207号、208号住居跡実測図……22
第25図　208号住居跡出土土器実測図……22
第26図　209号住居跡出土土器実測図……24
第27図　210号住居跡実測図……25
第28図　210号住居跡出土土器実測図……26
第29図　溝状遺構出土土器及びその他の出土土器実測図……29
第30図　土層観察トレンチ土器出土状況……29
第31図　土層観察トレンチ出土土器実測図……29
第32図　309号住居跡露出南北断面土層図……30
第33図　301号住居跡出土土器実測図……31
第34図　303号住居跡出土土器実測図……31
第35図　304号住居跡竈実測図……33
第36図　304号住居跡出土土器実測図……33
第37図　305号住居跡第11号溝実測図……34
第38図　305号住居跡出土土器実測図……34
第39図　307号住居跡出土土器実測図……35
第40図　308号住居跡出土土器実測図……35
第41図　溝状遺構出土土器実測図……38
別添付図　第２次、第３次調査遺構配置図……56

図版目次

図版１　浄土江遺跡Ａ－２区調査状況……6
図版２　Ａ－２区住居跡……7
図版３　Ｆ－３区遺物出土状態……9
図版４　浄土江遺跡第２次発掘調査全景……12
図版５　201号、204号住居跡……13
図版６　202号、203号住居跡……15
図版７　浄土江遺跡第３次発掘調査全景……30
図版８　304号住居跡……32
図版９　308号住居跡断面遺物……35
図版10　309号住居跡断面……36
図版11　９号、10号、11号溝状遺構……36
図版12　Ａ区、Ｅ区、Ｆ区出土遺物……44
図版13　Ｆ区出土遺物……45
図版14　Ｆ区、201号住居跡出土遺物……46
図版15　202号住居跡、203号住居跡出土遺物……47
図版16　204号住居跡、205号住居跡出土遺物……48
図版17　208号住居跡、209号住居跡出土遺物……49
図版18　210号住居跡、１号溝、９号溝出土遺物……50
図版19　第２次調査におけるその他の出土遺物……51
図版20　301号住居跡、303号住居跡、304号住居跡出土遺物……52
図版21　304号住居跡、305号住居跡、307号住居跡出土遺物……53
図版22　308号住居跡、11号溝出土遺物……54
図版23　11号溝、14号溝出土遺物……55

表目次

第１表　Ｆ－３区出土遺物観察表……11
第２表　第３次調査溝状遺構出土土器観察表……39

Ⅰ はじめに

浄土江遺跡の発掘調査は、昭和51年６月の刑務所移転を契機に始められ第３次調査まで実施するに至った。第１次発掘調査は、昭和18年に宮崎刑務所より発刊された「宮崎刑務所構内遺構及び遺物に就て」の報告書を基にして所内西南角にあたる医務所や病舎、扇形運動場周辺にＡ～Ｄ区、拘置場東側にＥ区、中央看守所の北側揚水塔の西南位置にＦ区の調査区を設定して行なったが、Ａ区において３基の住居跡が切り合い状態で確認され、Ｅ区では２基分、Ｆ区では１基分の住居跡が確認された。しかし、遺構は特殊な施設が建てられていたこともあって、いたるところが掘削されており、その残存状態は極めて悪い状態にあった。

第２次調査は、跡地の利用計画が成った建造物撤去後の昭和53年に実施した。この調査では、当初、所内西側壁に沿ったトレンチによる発掘調査を実施していたが調査の進行につれて住居跡や溝状遺構の発見が相次いだため、調査面積の拡大と調査期間の延長を行なうことになり多面的な発掘調査となった。この調査では、遺構の集りを南側と北側に分けることができ、南側においては４基の住居跡を確認したが、それらは各々、溝状遺構を伴うものであり、北側では６基の住居跡が各々、切り合う状態で確認された。

第３次調査は、昭和54年の公共下水道函渠築造工事に伴って、第２次調査区西側の市道部分を対象に実施した。この調査では、第２次調査で確認した住居跡や溝状遺構の拡がりをみることができ、新たに９基分の住居跡を確認することができたが道路下ということもあってガス管等の敷設物が遺構を破壊しており、完全な状態での遺構はみることができなかった。

第１次発掘調査団の構成（昭和52年８月16日～同年８月26日）

調査主体　宮崎市教育委員会
調　査　員　田中　茂（国富小学校教諭）
調査担当者　野間重孝（社会教育主事）
調査協力　沢　皇臣（福岡市文化課）、北郷泰道（宮崎考古学会員）
調査補助員　福尾正彦（九州大学）、加治木草成、足立宏美、渡辺康隆、東　光一、緒方昭彦　花田良彦、浜川道也、上山伸二、若林昭彦、浦　民雄　（以上、宮崎大学史学研究部）
事　務　局　宮崎市教育委員会
教育長　渡辺綱夫　教育次長　朝飛初美
社会教育課長　大島清一　同補佐　結城康嘉　主事　甲斐克美

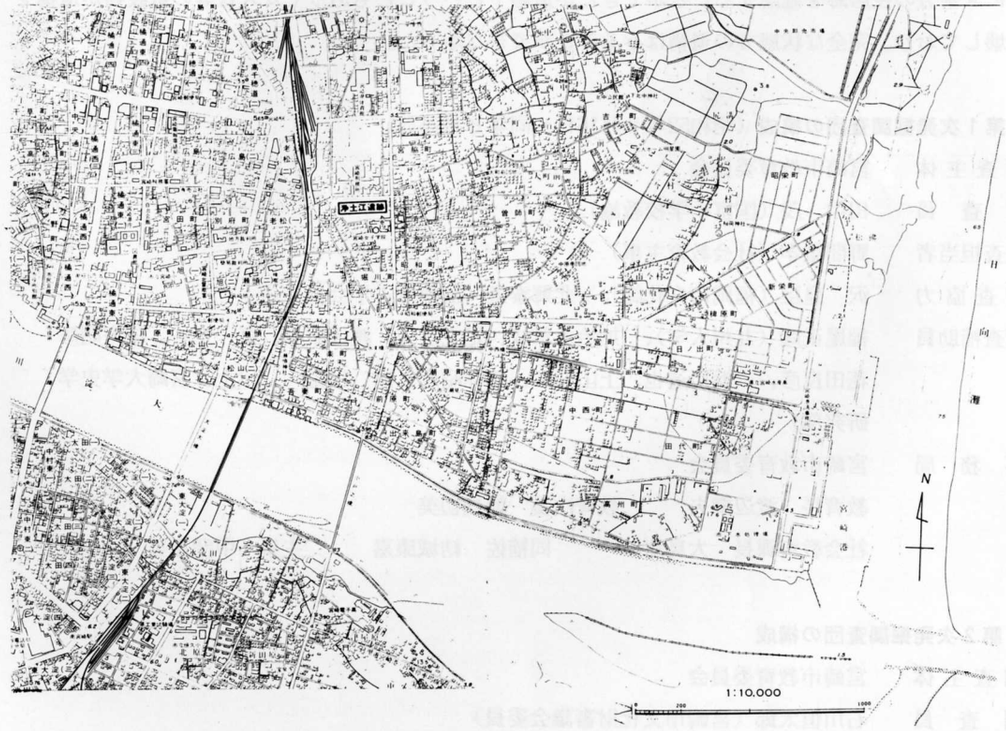
第２次発掘調査団の構成

調査主体　宮崎市教育委員会
調　査　員　石川恒太郎（宮崎市文化財審議会委員）
茂山　護（県総合博物館学芸員）

調査担当者　野間重孝（社会教育主事）
　　北郷泰道（社会教育指導員）
調査補助員　石川博久、安藤忠親、辻　真一郎、中崎芳廣、神田慎一
　　花田良彦（宮崎大学史学研究部員）他９名
　　宮崎大学、南九州大学、宮崎実業高校生
事　務　局　宮崎市教育委員会
　　教育長　黒木定彌　　教育次長　長友　平
　　社会教育課長　結城康嘉　　同補佐　松山耕吉　　同主事　甲斐克美

第３次発掘調査団の構成

調 査 主 体　宮崎市教育委員会
調査担当者　野間重孝（社会教育主事）
　　北郷泰道（社会教育指導員）
調査補助員　熊本組（下水道埋管工事請負業者）作業員
事　務　局　宮崎市教育委員会
　　教育長　黒木定彌　　教育次長　長友　平
　　社会教育課長　赤崎寿人　　同補佐　松山耕吉　　同主事　菊池　進



第１図　浄土江遺跡位置図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

浄土江遺跡は、宮崎市浄土江町108番地ほかに位置しており、南東方位２㎞余りで大淀川河口に達し、南に大淀川、東に一ツ葉入江、さらには日向灘と開けている。この地は、大淀川の氾濫等によって宮崎平野の沖積地が進行して、微高地や自然提防を形成したところである。遺跡は、現在の広島通りから日豊本線（宮崎駅）を東に横切る形で延びた自然提防上に営まれたと思われる。周辺地には微高地も多く形成されており、それらには当遺跡と時期を前後する遺跡が分布しており、大町遺跡、別府遺跡、春山遺跡、引土遺跡等は、その代表遺跡である。また、西側には、広島古墳群が存在していたことが知られているが、現在では市街地化されて、その形状をとどめていない。しかし、それらの古墳から出土した内行花文鏡[1]及び画文帯神獣鏡[2]片は宮崎県総合博物館に保存されており、それらの古墳を知るうえでの貴重な資料となっている。なお、この広島古墳群と、住居跡を伴う当遺跡との関連についても興味のもたれるところである。

昭和18年に出された「宮崎刑務所構内遺構及び遺物に就て」には、当遺跡からの布目平瓦や石塔婆の存在が述べられているが、この地を「浄土江町」と呼ぶことや、この地にゆかりの深い浄土院という寺院が現在、一の宮町に存在することなどの事例によって、当遺跡が往古からの寺院跡であったことが推測される。また、明治18年８月には、この地に宮崎監獄署が建設されて昭和51年６月の宮崎刑務所の移転に至るまで、その任を果し続けてきた。

註　(1)、(2)「特別展、日向の古墳展」図録　宮崎県総合博物館 1979. 9

Ⅲ　調査の経過と概要

第１次調査　（昭和52年８月16日～同年８月26日）

Ａ～Ｆ区の調査区を設定して調査を進めた。Ａ区では、２本のトレンチを組んだが南側壁寄りの第Ⅰトレンチでは、遺物、遺構の確認は出来なかった。扇形運動場の北側に組んだ第Ⅱトレンチでは、３基の住居跡を検出したが完全な状態ではなく、それぞれが切り合い状態で確認された。遺物については、土師器の坏を主体とし、須恵器片を数点出土するにとどまった。Ｂ区については、トレンチの南側寄りに一部包含層を残しており、粗製の壷形土器を１点出土したのみである。Ｃ区、Ｄ区は、遺物包含層を確認できず、Ｅ区でも撹乱がひどく遺構の検出には苦労したが、この区では２基分の住居跡を検出した。遺物は、土師器の坏と須恵器の坏を出土している。Ｆ区においては、３本のトレンチを組んだが北寄りの第Ⅲトレンチにおいて住居跡と多くの遺物包含層をみることができた。遺物には甑、甕形土器、長胴甕形土器、高坏等の当時の生活用具をセットとして出土した。興味深い発見であろう。また、第Ⅱトレンチからは、14世紀中葉から後葉期の常滑甕形土器の口縁部を出土ししている。

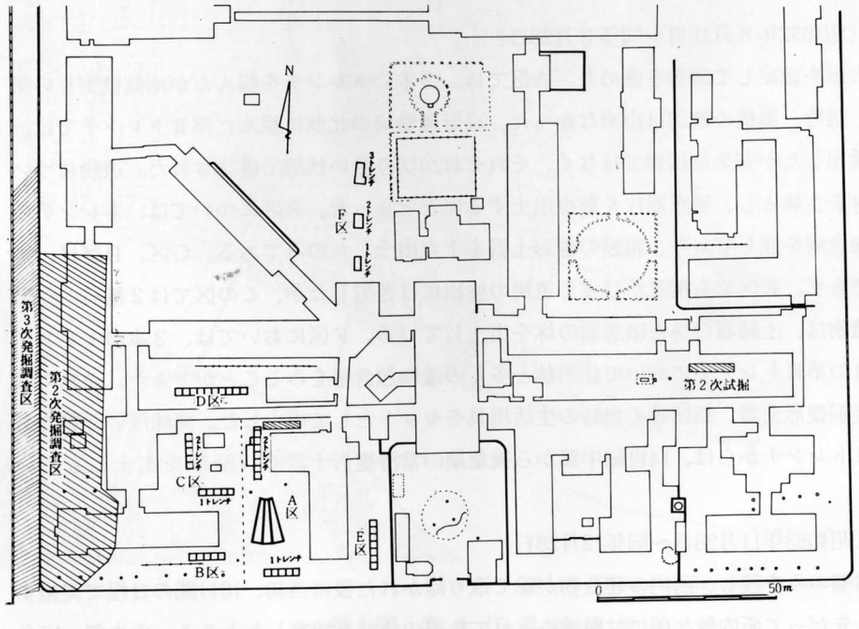
第２次調査　（昭和53年11月28日～同年12月28日）

この調査は、外壁のみを残し、所内の建造物が総て取り除かれた後に当初、10日間の日程で実施することになった。先だって所内数ケ所に試掘溝を入れて土層の状況を観察したところ、中央部、庁舎

北側あたりから東方に寄るにしたがって包含層とみられる黒褐色土層が薄くなることや、その下には黄褐色土層から砂利混入の砂層となっていることから遺構等の残存状態は悪いものと思われた。そこで、所内西南角にあたる西側外壁に沿って南北に2m×20mのトレンチを設定して調査を進めることになった。調査では、上層において建造物等の基礎にあたり掘り下げは難行したが、下部から溝状遺構（1号溝）及び住居跡（201号）の縁辺部を検出することができた。そこで、調査区の拡張を行ない遺構の検出につとめることになったが当初の調査日程も残り少なくなってきており、201号住居跡の完掘さえ危ぶまれる状況となった。そこで協議の結果、調査日程を1週間延長して引続き調査を行なうことになり、順次調査区域を拡大していった。その結果、新たに2号溝、202号、203号住居跡を検出することができたが人力による掘り下げには限界があり、期間内の完掘は困難と思われた。しかし、遺構はなおも拡大するものと思われ各溝状遺構の延びと東側、北側の遺構の存在も懸念された。そこで再度延長を協議し、12月28日まで延長することになった。しかも、再延長時には、重機を導入するとともに調査補助員も増員しての調査となり、北側に90m、東側に約15mのいわば面的調査となったが、その結果、南側において201号～204号の4基の住居跡と1号～7号の溝状遺構を検出し、北側では205号～210号の6基の住居跡と8号溝、交叉する9号、10号の溝状遺構を検出している。

第3次調査　（昭和54年10月15日～同年11月3日）

第2次調査まで残されていた外壁も取り除かれて一帯は広大な空地となっていた。2次調査区の西方に沿っては市道が南北に走っているが、この市道下に公共下水道函渠築造工事が施されることになった。2次調査においては遺構の拡がりが西方に延びることも予測されていたため、それに先だって調査することになったが、その対象が道路下ということもあって水道管、ガス管等の埋設物が多く、その掘削は遺構にまで及んで遺構の残存状況を悪化させていた。しかし、南側部分において301号、302号、307号の住居跡の一部を検出し、西側断面において、308号、309号の住居跡を確認し得た。また、北側においては2次調査の際に検出した9号、10号の溝状遺構の延長をみた。さらに10号溝に注ぐ南北に延びる11号溝（南北溝）を伴って303号～306号の住居跡を検出している。



第2図　浄土江遺跡発掘調査区位置図

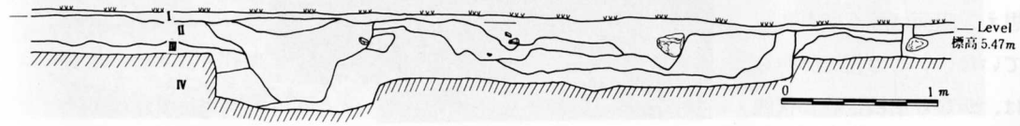
Ⅳ　第1次発掘調査

1.　A－2調査区

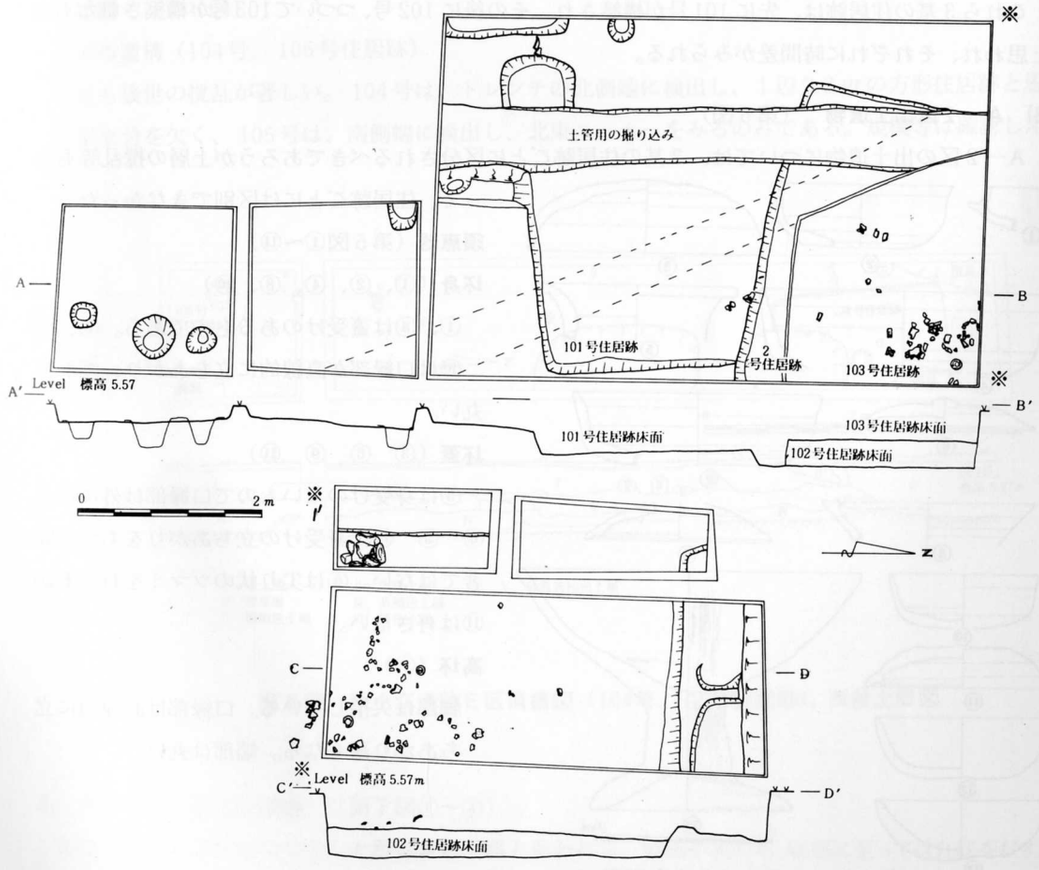
(1)　A－2区の層位

A－2区は、拘置舎の西側の狭い空地にあたるため、いたるところで攪乱を受けており層位の正確さに乏しい点がある。第Ⅰ層は、表土層であり第Ⅱ層に暗褐色土層が入り、第Ⅲ層に茶褐色土層が入る。この層から住居跡の掘り込みを観察することができ、第Ⅳ層は黄褐色土層となり、住居跡の床面となっている。下層は小砂利混りの砂層となっている。

(2)　A－2区の遺構　（101号、102号、103号住居跡）

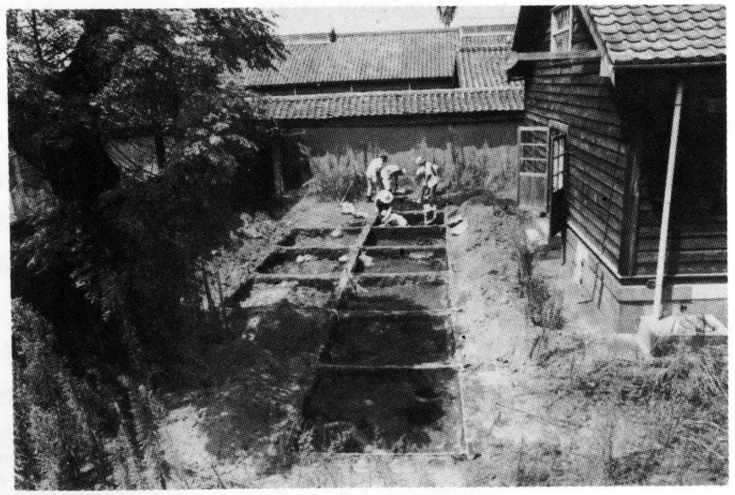


第3図　浄土江遺跡A－2区　東壁土層図



第4図　浄土江遺跡A－2区遺構図（101号～103号住居跡）

3基の住居跡を検出している。101号は、北壁と西壁の一部と北西隅を残した方形状の住居跡である。102号は、101号の南半分を切り込む形で北壁の一部と北東隅を残し、やや南に振った略方形を呈する住居跡である。103号は、102号の埋没後に構築されたものと思え、床面は浅く壁も残していない。この住居跡からは、かなり集積された状態で遺物を出土している。

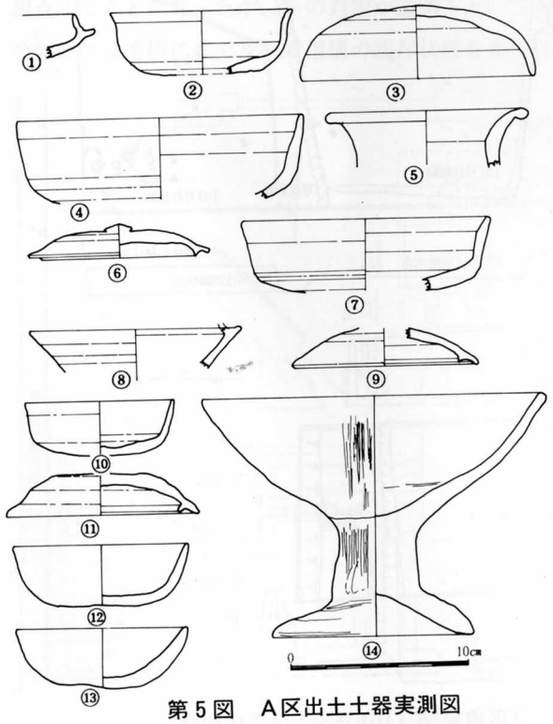


図版(1) 浄土江跡A－2区調査状況

これら3基の住居跡は、先に101号が構築され、その後に102号、つづいて103号が構築されたものと思われ、それぞれに時間差がみられる。

(3) A－2区出土遺物 （第5図）

A－2区の出土遺物については、3基の住居跡ごとに区分されるべきであろうが上層の撹乱等もあって、住居跡ごとには区別できなかった。



第5図 A区出土土器実測図

須恵器（第5図①～⑪）

坏身（①、②、④、⑧、⑩）

①、⑧は蓋受けのあるものである。②、④⑩は口縁部が直線的に立ちあがり、端部は丸い。

坏蓋（③ ⑥ ⑨ ⑪）

③は身受けのないもので口縁部は外に反る⑥ ⑨ ⑪は身受けの立ちあがりをもつが顕著ではない。⑥は尖り状のツマミを有するが⑪は有さない。

高坏（⑦）

脚部は欠損している。口縁部は直線的に立ちあがり薄くなる。端部は丸い。

壷形土器（⑤）

口縁部は外反気味に開き、端部は丸く反り返る。頸部から胴部を欠損している。

土師器（⑫ ⑬）

坏 ⑫は口縁部が直線的に立ちあがり、薄くなる。⑬は底部から口縁部にかけてゆるやかに立ちあがり肥厚し、底部にヘラ記号をもつ、

高坏（⑭）

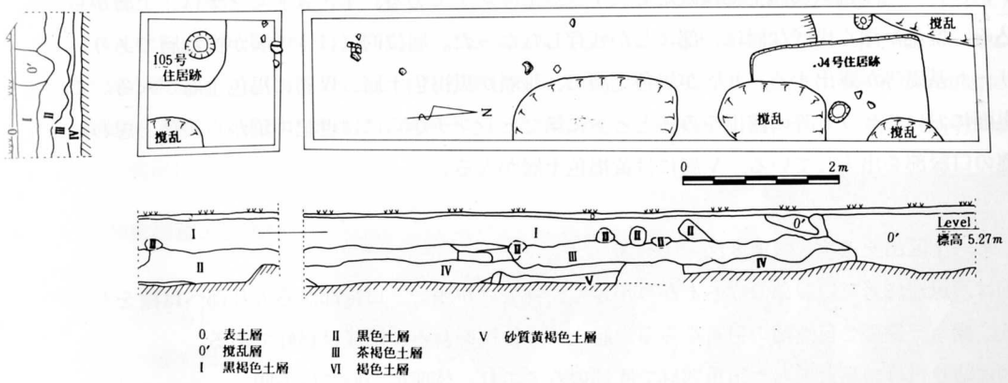
坏は体部から口縁部にかけて、やや内湾気味に開く端部は丸い。脚は基部が円柱状を呈し、裾部が大きく開く。端部は丸い。

図版2 A－2区住居跡

2. E区 （第6図）

E区の遺構（104号、105号住居跡）

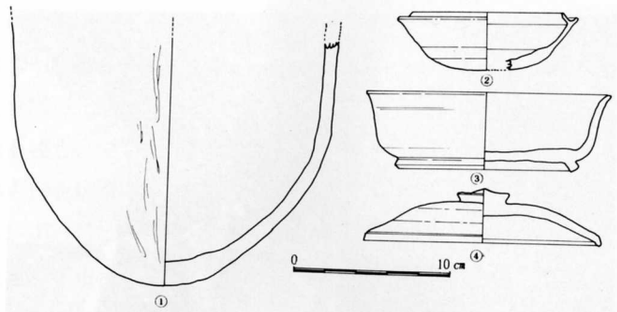
E区も後世の撹乱が著しい。104号は、トレンチの北側端に検出し、1辺2.2 m の方形住居跡と思われ東半分を欠く、105号は、南側端に検出し、北東コーナーをみるのみである。規模等は確認しえない。



第6図 浄土江遺跡E区遺構図（104号、105号住居跡）、西壁土層図

3. B・C・E区出土遺物 （第7図①～④）

①はB区の東側断面に出土した粗製壷形土器と思われる。胴部が脹らみ、底部に至っては丸底をなす。成形は輪積みによるものと思え、調整は縦方向のヘラ削りによる。胎土に石粒を含み赤褐色を呈する。



第７図　Ｂ区、Ｃ区、Ｅ区出土土器実測図

②はＣ－２区より出土した須恵器坏身である。立ちあがりは内傾し短い。受部は短く上外方に開く、底部は肥厚し、平坦、横ナデ調整、焼成は良好で青灰色を呈する。

③はＥ区の住居跡外より出土した須恵器坏身で高台をもつ。口縁部はやや外反気味で直線的に立ちあがる。底部は巻あげによる。横ナデ調整、焼成悪く白灰色を呈する。

④はＥ区出土の土師器坏蓋である。天井部にボタン状のツマミを有し、天井部から口縁部にかけてゆるやかに稜を成す。口縁部にわずかの内反りをみる。ヘラ削り調整、焼成良好、赤褐色を呈する。

4.　Ｆ区　（１～３トレンチ）

(1)　Ｆ区の層位（第９図）

Ｆ区は、中央庁舎の北西空地に設定した１～３トレンチである。１・２トレンチは、上層からの掘り込み、撹乱が深く良好な層は一部にしか残存しなかった。層位的には、Ⅰ層が撹乱層であり、コンクリート基礎等が露出する。Ⅱ層が黒色土層で、Ⅲ層が黒褐色土層、Ⅳ層に褐色土層が入る。この層の上面においてピット等の露出をみるとともに第２トレンチからは14世紀中葉から後葉と思われる常滑甕の口縁部を出土している。Ⅴ層には黄褐色土層が入る。

(2)　Ｆ－１区出土遺物　（第８図　①～④）

①は須恵器坏蓋で口縁部の立ちあがりが短く、身受けが浅い。口縁部から天井部へは稜をもち肥厚する。横ナデ調整で自然釉の付着をみる。胎土に小砂粒を含み、焼成は良好である。

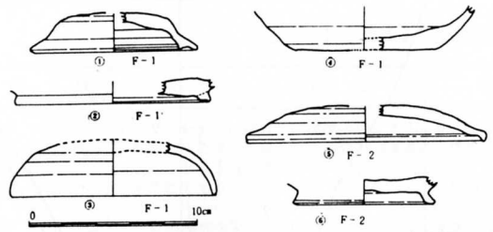
②は貼り付けの高台をもつ須恵器坏で底部のみであり、体部については不明

③は須恵器坏蓋で身受けがなく、天井部から口縁部にかけて内湾する。天井部ヘラ削りで口縁部は横ナデである。胎土に小砂粒を含み、焼成は良好で淡青灰色を呈する。

④は須恵器坏の底部で、ヘラ切り離しの後ナデ調整。焼成は良好で淡黒灰色を呈する。

(3)　Ｆ－２区出土遺物

⑤は須恵器坏蓋で天井部は浅く平担である。口縁部でわずかに外反し、端部で立ち、内側に稜をもつ、焼成は悪く、灰褐色を呈する。

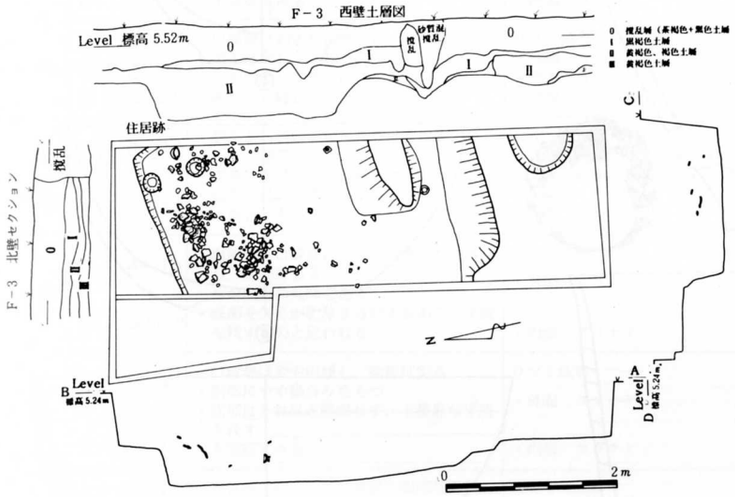


第８図　Ｆ－１区、Ｆ－２区出土土器実測図

⑥は貼り付けの高台をもつ須恵器坏で焼成は良好、青灰色を呈する。

(4)　Ｆ－３区の遺構（106号住居跡）（第９図）

Ｆ－３区においては106号住居跡を検出しているが周辺部は建造物の基礎等によってかなり掘削を受けており、一部を確認するにとどまった。住居跡は、北壁の一部と北東部を残すにすぎず、褐色土層から掘り込まれて壁高は40㎝を計る。北壁から北東部隅より南側は、プランを良く残しており、甑が押しつぶされた状態を中心にかなりの遺物が集積していた。また、南壁については上部からの掘り込みによってかなり乱されてはいるものの推定線は出せる。それによると住居跡の構造は、１辺がほぼ3.5mの方形状を呈すると考えられる。また、ピットが北東隅に寄って北壁側に１個と、平行に離れて１個検出されているが、この住居跡に伴うものであるか否かは判然としない状況にある。

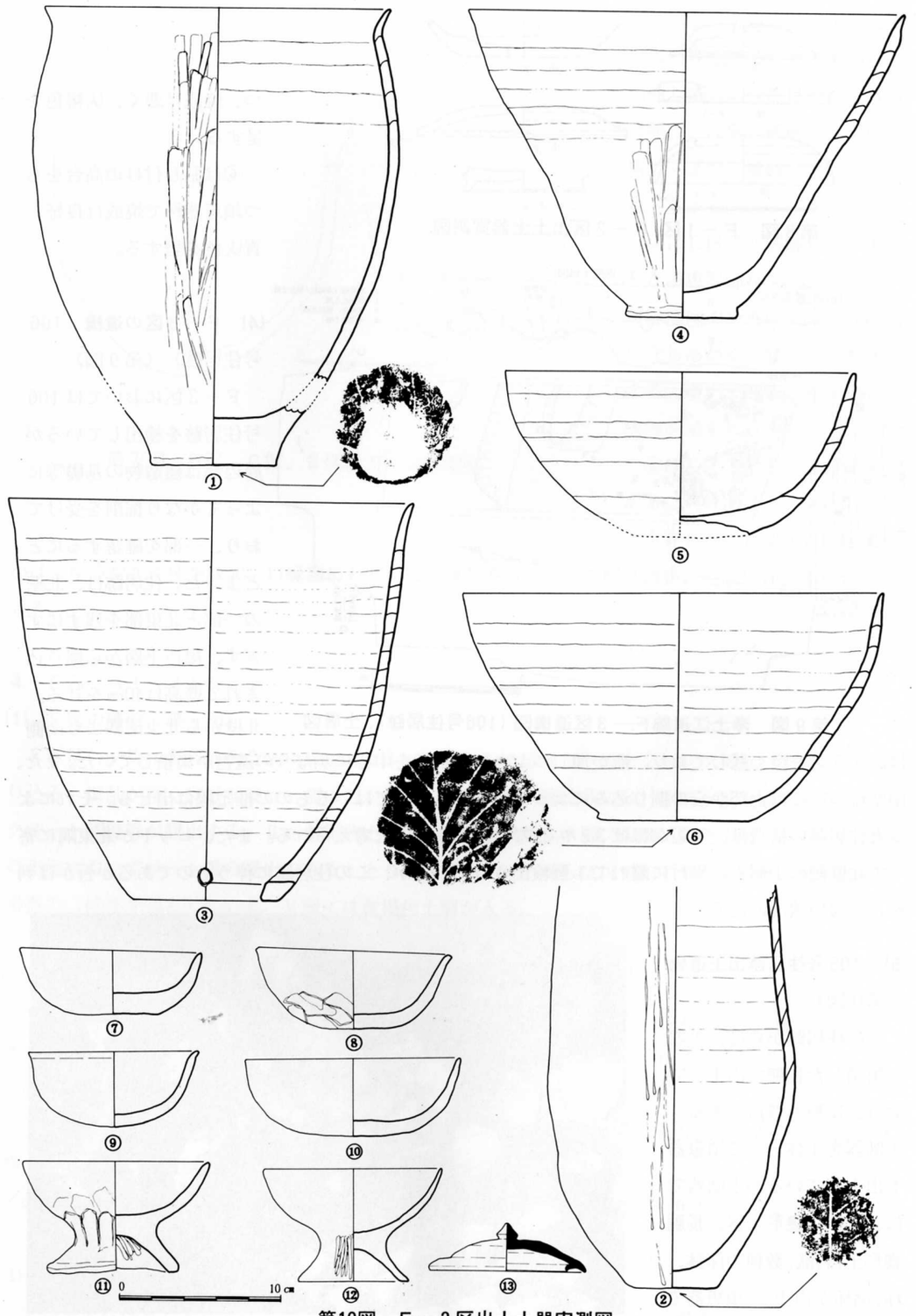


第９図　浄土江遺跡Ｆ－３区遺構図（106号住居跡）、土層図

(5)　106号住居跡出土遺物（第10図）

この住居跡からは、土器が集積した状態で出土しており、器種も豊富である。土師器を主体として須恵器も出土しているが土師器では、大型の甕形土器、長胴甕形土器、甑、数種の深鉢、坏、高坏が出土し、須恵器では、坏等が出土している。

図版３　Ｆ－３区遺物出土状態



第10図　F－3区出土土器実測図

第1表　F－3区出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径 21.5 頸部径 20.5 胴部径 22.7 器高 28.5	・頸部がわずかに締り、口縁部は外反する。 ・胴部はゆるやかに張らみ、底部へすぼまる。 ・底部は厚い平底を成す ・木葉底である	ワヅミ成形 ・外面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラナデ ・内面　ヨコナデ	焼成　良好 色調　褐色 胎土　砂粒多し
2	甕	口径 —— 頸部径 13.5 胴部径 15.3 器高 ——	・口縁部頸部を欠く ・胴部はやや張らむが直線的 ・底部は内湾気味にすぼまり薄い平底を成す ・木葉底である	ワヅミ成形 ・外面　タテのヘラナデ ・内面　ヨコナデ	焼成　やや軟質 色調　淡黄褐色 胎土　砂粒を多く含む
3	甑	口径 25.0 透部径 6.6 器高 25.0	・口縁部はわずかに外反し、端部は尖る ・把手はなし ・やや内湾して透部にいたる ・透部に対峙して穿孔をみる	ワヅミ成形 ・外面　ヨコナデ ・内面　ヨコナデ ・透部　ナデ調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　石粒を含む
4	深鉢	口径 27.0 器高 19.0	・胴部から口縁部にかけては直線的にひろがり、端部は尖る ・底部にかけてはやや張らみをもつ ・底部は低い平底を成す ・木葉底である	ワヅミ成形 ・外面　胴部から口縁部がヨコナデ 胴部から底部タテのヘラナデ ・内面　ヨコナデ	焼成　良好 色調　褐色 胎土　石粒を多量に含む
5	鉢	口径 21.5 器高 10.2？	・胴部から口縁部にかけて内湾にたちあがり、端部は尖る ・やや浅めの丸鉢である ・底部を欠くが肥厚するむきがあり、平底を残すものと思われる	ワヅミ成形 ・外面　ヨコナデ ・内面　ヨコナデ	焼成　やや軟質 色調　褐色 胎土　石砂粒を多量に含む
6	深鉢	口径 26.1 器高 14.2	・口縁部はやや内傾し、端部は尖る ・胴部にやや張らみをもつ ・底部はそれほど肥厚せず、不整形な平底を成す ・木葉底である	ワヅミ成形 ・外面　ヨコナデ ・内面　ヨコナデ	焼成　良好 色調　茶褐色 胎土　砂粒を含む
7	土師器	口径 11.2 器高 3.9	・口縁部は短く、やや外反し端部は丸い ・底部は非常に厚く、全体的に厚みのある浅い坏である	手づくね成形 ・外面 {・口縁部　ヨコナデ ・体底部　ヘラ削り} ・内面 {・口縁部　ヨコナデ ・体底部　ヘラ削り}	焼成　やや軟質 色調　茶褐色 胎土　粗、砂粒を含む
8	土師器	口径 12.1 器高 4.9	・口縁部は開き気味にたちあがり、端部において反りをみる ・底部はヘラ削りにより不成形を成す	ロクロ成形 ・外面 {・口縁部　ヨコナデ ・体底部　粗いヘラ削り} ・内面 {・口縁部　ヨコナデ ・体底部　ハケ目}	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　粗
9	土師器	口径 10.6 器高 4.7	・口縁部は内湾気味にたちあがり、端部はわずかに外反する ・全体的に薄く成形されている	手づくね成形 ・外面 {・口縁部　ヨコナデ ・体底部　ヘラ削り} ・内面 {・口縁部　ヨコナデ ・体底部　ハケ目}	焼成　良好 色調　赤褐色 胎土　粗、砂粒を含む
10	土師器	口径 13.4 器高 4.8	・口縁部はやや内湾気味に大きく開き、端部は尖る ・底部は少々、肥厚する ・木葉底である	手づくね成形 ・外面 {・口縁部　ヨコナデ ・体底部　ヘラ削り} ・内面 {・口縁部　ヨコナデ ・体底部　ハケ目}	焼成　良好 色調　淡赤褐色 胎土　密、砂粒を少量含む
11	土師器高坏	坏部口径 11.6 坏部高 3.4 脚部裾径 8.3 脚部高 3.4	・口縁部はやや内湾気味であり、端部は丸い ・脚部は基部が締り、大きく開く裾部をもつ ・粗雑な作りである	坏部　・口縁部ヨコナデ ・外面　ヘラ削り ・内面　ヨコナデ 脚部　・外面　ヘラ削り ・内面　ヘラナデ	焼成　良好 色調　茶褐色 胎土　砂粒を多量に含む
12	土師器高坏	坏部口径 11.0 坏部高 3.9 脚部裾径 6.9 脚部高 3.1	・口縁はやや内湾気味に開き端部は尖る ・脚部は細く、長めの基部をもち裾部は小さい開きをみせる	坏部　・外面　ヨコナデ ・内面　ヨコナデ 脚部　・外面　ヘラ削り ・内面　ヘラ削り	焼成　良好 色調　褐色 胎土　少量の砂粒含む
13	須恵器蓋	口径 9.8 器高 1.9 ツマミ高 1.0	・身受け部より、たちあがりの低いものである ・天井部から口縁部にかけて稜をもつ ・尖り状のツマミを有する	マキアゲ ・天井部　回転ナデ ・口縁部　ヨコナデ ・内面部　ナデ	焼成　良好 色調　灰黒色 胎土　密、わずかに砂粒を含む

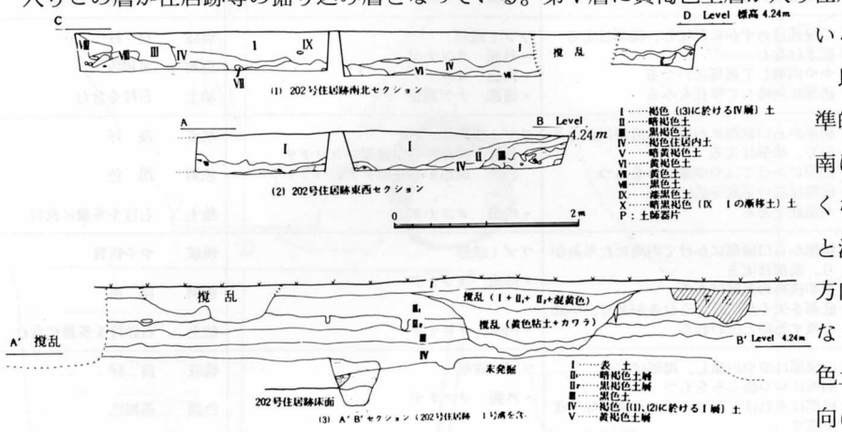
V　第２次発掘調査

1. 層　位　（第11図）

202号住居跡の中央部を東西に切った状態で層位を観察した。この地点でも上部からの撹乱は多いが、幸いにして遺構が深いため、それらへの損傷は少ないようであった。

第Ⅰ層は、表土層が約20㎝あり、第Ⅱ層に黒褐色土層が30㎝入る。この層は、漸移層の暗褐色土層とに分けることができる。第Ⅲ層に黒色土層が20㎝の厚みで帯状に入る。第Ⅳ層に褐色土層が約20㎝入りこの層が住居跡等の掘り込み層となっている。第Ⅴ層に黄褐色土層が入り住居跡の床面となっている。

以上が、この地の標準的な層位であるが、南に移行すると層が深くなり、北に移行すると浅くなる。特に北東方向になると上層部がなくなり、下層の黄褐色土層が砂質化する傾向にある。



第11図　浄土江遺跡 202号住居跡周辺土層図

2. 住　居　跡　と　出　土　遺　物　（201号～202住居跡）

第201号住居跡（第12図）

位　層

外壁の南西隅から西外壁に沿って約12m北に寄った東側に位置している。この住居跡は、無傷であり、２次調査の期間延長と調査区拡大をもたらす端緒となったが調査の結果、201号には４基の住居跡が近接し、南部集落を形成していた。

構　造

形状は、南西隅部に南北0.6m、東西1.3mの作り出しをもつ方形状を呈する。

規　模　北辺長4.9m、南辺長4.1m＋1.3m、東辺長4.6m、西辺長3.5m＋0.6mである。

主軸の方位　N－3°－W。

住居跡の床面は、二重に築き固められた形跡をみる。

図版４　浄土江遺跡第２次発掘調査全景

炉跡　中央部に位置し、底部を欠いた甕形土器が据えられており、周囲に炭や焼土をみることができる。

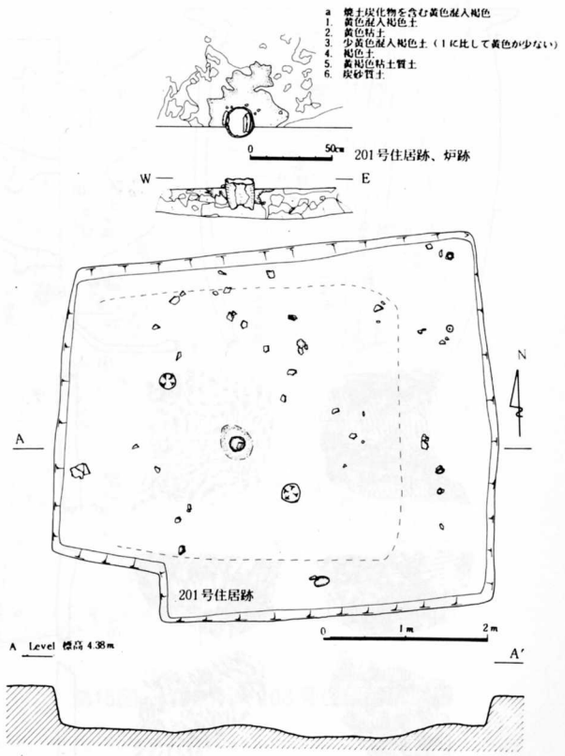
柱穴　炉跡を中心に北東隅と南西隅の対角線上に２個検出しており、床面から30㎝掘り込まれている。

壁　良く残されており、壁高は45㎝を計る。

出　土　遺　物　（第13図）

土師器　（第13図①、②、③、④）

甕形土器　（①）底部を欠き、炉跡に据えられた状態で出土した。口縁部は、短く直線的に「く」字形に外反し、胴部がやや脹らみをもち長胴形を呈する。口縁部は、内外面ともヨコナデ調整を施し、外面胴部は粗い擦痕が残り、胴下部に炭化物が付着している。内面は粗いヨコナデであり胴下部に炭化物が付着している。胎土に石砂粒を多量に含み、焼成はやや軟質で黄褐色。



第12図　201号住居跡実測図——同炉跡実測図

高坏　（②、③、④）　②は坏部の底部に脚部との接合のためヘソを作り出している。いずれも脚部は薄く裾ひろがりになる傾向がみられる。

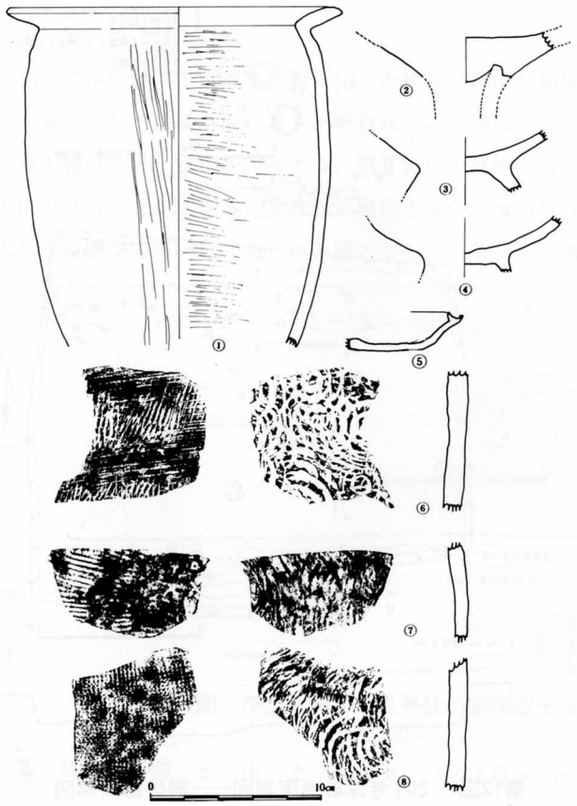
須恵器　（第13図⑤、⑥、⑦、⑧）

坏身　（⑤）口縁部の立ちあがりは短く、端部は尖る。受け部は小さく内側に折り曲げている。底部は、ヘラ切り離しであり、口縁部はヨコナデ調整を施している。

図版５　201号、204号住居跡

部は、ヘラ切り離しであり、口縁部はヨコナデ調整を施している。

⑥、⑦、⑧は、大型の甕形土器の胴部である。⑥は、外面は横目タタキに一部縦位のタタキを加えたものと思われ、内面は同心円文タタキである。⑦、⑧は、外面を格子目タタキ、内面を青海波文タタキで調整している。何れも外面には自然釉の付着をみる。



第13図　201号住居跡出土土器実測図

石　器　（第14図①、②、③、④）

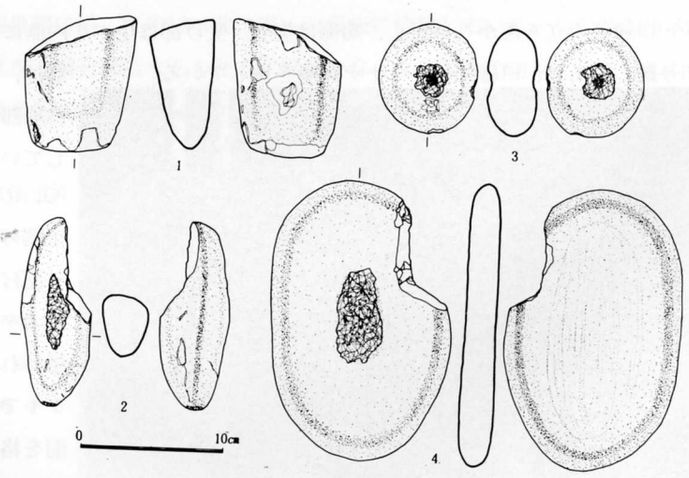
石斧（①）　大型の摩製斧で基部を欠いている。刃部は、両刃で剥離面がみられる。断面は凸レンズ状を呈する。石質は石英斑岩。

敲き石（②）　石棒的な敲き石で基部の片半分が割れている。先端部が尖り、顕著な敲打痕をみることができる。石質は灰色砂岩。

窪み石（③）　やや扁平な丸石の両面に直径2㎝、深さ0.5㎝の窪みをもつものである。窪みは、先端の鋭利な物で突いてあけたものと思われる。周囲に打痕はみられない。石質は砂岩。

石皿（④）　扁平な円礫を使用したもので一部を欠いている。両面ともに顕著な使用痕をみることができる。1面は、磨石の台として使用されたものと思われ表面がやや窪みがちになって磨滅している。裏面は、敲き石台として使用されたものと思われ、中央部に粗い敲打痕を残している。

石質は砂岩。



第14図　201号住居跡出土石器実測図

第202号住居跡　（第15図）

位　置

201号住居跡から2号溝を挟んで3.5ｍ北側に離れて発見され、南部集落に属する。住居跡西半は、刑務所当時の外壁が残り調査不能のため確認されなかった。東辺は、203号住居跡と切り合っている。

構　造

形状　住居跡西半分が未確認であるが方形状を呈すものと思われる。

規模　西辺と北辺は不明であるが南辺長5.0ｍ、東辺は203号住居跡で切られているが6.6ｍを計る。

主軸の方位　N－12°－W

炉跡　中央部より、やや南東の方位に位置し1面に焼土をみる。

柱穴　検出されなかった。

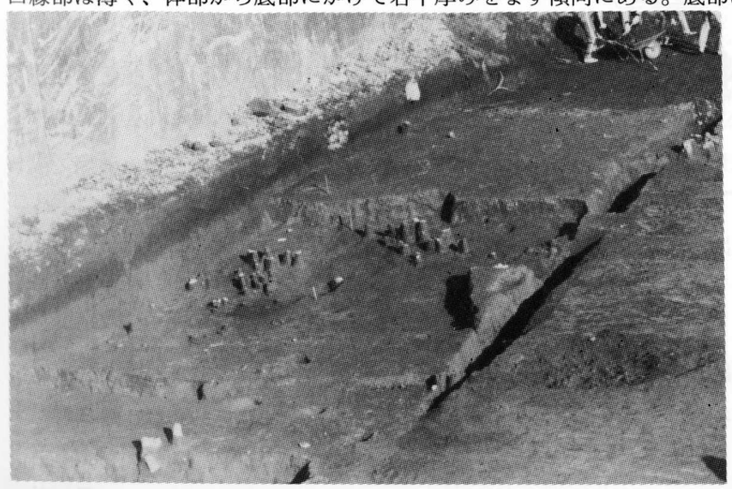
第15図　202号、203号住居跡実測図

床・壁　住居跡は褐色土層を上面にして、黄褐色土層を掘り込んでいる。現存壁は顕著であり、壁高は35㎝を計る。

出　土　遺　物　（第16図①～⑤）

住居跡床面からは土師器、須恵器が破砕された状況で出土している。

須恵器　坏身　①は立ちあがりが長く1.8㎝を計り、やや内傾する。端部はやや肥厚し、先端内側に小さい凹みを有する。受け部は立ちあがりとの境に沈線をめぐらし、張り出しが立ち気味である。口縁部は薄く、体部から底部にかけて若干厚みをます傾向にある。底部は薄くなる。口縁部はヨコナデ調整で外面、体底部は磨滅しており不明。内面はヨコナデ調整である。胎土は密で焼成良好、外面は白灰色、内面は青灰色を呈する。

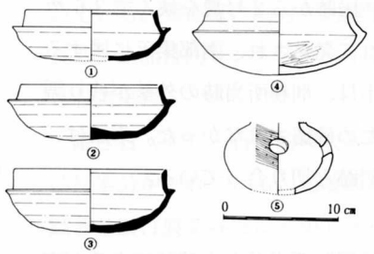


図版6　202号、203号住居跡

②は立ちあがりが①より低く1.6㎝を計る。立ちあがり端部は退化した凹みをもち肥厚しない。受け部は立ちあがりとの境の沈線も退化し、張り出しが水平化

する。器厚も全体的に厚みを増す傾向にある。口縁部はヨコナデ調整で底部にヘラ切り離しをみる。外面体部は器面が粗い。内面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み焼成は良好で青灰色を呈する。

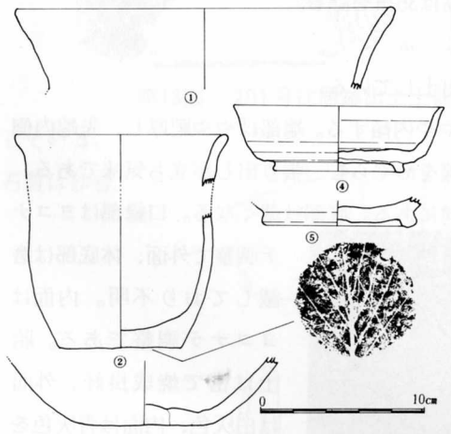
③は立ちあがりが長く 2.1 ㎝を計る。形態は①②と同じようであるが立ちあがり端部の凹みが浅くなりさほど顕著ではない。受け部は立ちあがりとの境に沈線をめぐらし張り出しが立ち気味である。口縁部は薄く、体部にかけてしだいに厚くなり、底部に至っては若干薄くなる。口縁部はヨコナデ調整で底部はヘラ削りである。体部の器面は粗く内面はヨコナデ調整。胎土に砂粒を含み焼成は良好。青灰色を呈する。



第16図　202号住居跡出土土器実測図

土師器　坏身　④は、須恵器坏を土師器で模倣したものである。口径 12.3㎝、器高 5.5㎝であり立ちあがりは内傾し 2 ㎝を計る。受け部は顕著でなく稜を成すのみである。体部は内湾して底部に至る。器厚は底部を除いて平均化している。口縁部外面はヨコナデ調整で体部はヘラ削りである。立ちあがり部内面はヘラ磨きで内面はヘラナデ調整である。胎土は密で焼成良好。淡赤褐色を呈する。

土師器　鍋　⑤は須恵器鍋を土師器で模倣したものであり、頸部を欠く。胴部は最大径 9.5㎝を計る。肩部にゆるやかな稜をもち、この部分に径 1.1㎝の穿孔をもつ。穿孔は成形後に外面から穿たれたもので内面に盛りあがりをみる。外面は横方向のヘラ磨きである。胎土に少量の砂粒を含み焼成は良好で淡黄褐色を呈する。



第17図　203号住居跡出土土器実測図

第 203 号住居跡　（第15図）

位　置

202号住居跡の東辺を切り、住居跡の西半を共合する形で発見され南部集落に属する。東辺は南北に延びる第 1 号溝状遺構をも切っている。

構　造

形状　住居跡東半を検出するのみであるが、おそらく方形状を成するものと思われる。

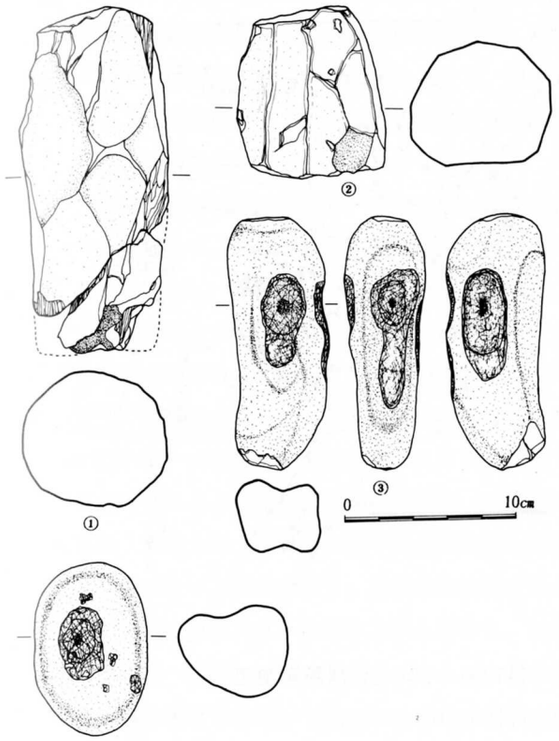
規模　東辺長 2.9 *m* を計るのみであり、かなり小形な住居跡である。

主軸方位　N－2°－W

竈　東壁中央部に接して附設されていたものと思われる。幅60㎝、長さ60㎝に粘質の焼土をみることができる。竈本体は崩れており、その形状は不明であるが中央部に多角柱状に削られた軽石製の支脚を検出している。

柱穴　検出することができなかった。

床・壁　床面については、202号住居跡の床面と明確に区分することはできなかった。壁は、南壁、東壁、北壁ともに一部を残すのみであり全容はつかめない。



第18図　203号住居跡出土遺物実測図

出土遺物（第17図①～⑤）（第18図①～④）①～④）

遺物の出土は散逸的であるが竈部から木葉底の小型の深鉢が出土している。

土師器（第17図①、②、③）

甕形土器　①は口縁部であり端部は丸くなる。外面、内面ともヨコナデ調整であり外面は黒く煤が付着している。胎土に石粒を含み焼成は良好で黄褐色を呈する。

鉢形土器　②は小型の鉢形土器でワヅミ成形をなす。口縁部はやや外反し胴部は直線的で脹らみをもたない。底部で若干すぼまり、厚い平底をなす。底部は木葉底である。外面は風化剥離を受け調整痕は不明である。内面はヨコナデ調整であり、胎土に多量の砂粒を含み、焼成は悪く暗黒褐色を呈する。

浅鉢　③は浅鉢の底部と思われる。底部は平担で湾曲しながら体部に立ちあがる。外面はヘラナデ調整で内面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み焼成は良好で赤褐色を呈する。

須恵器（第17図④、⑤）　④、⑤は高台付の坏である。④は体部が直線的に立ちあがり、口縁部でわずかに外反し、端部は尖る。体部は内外面ともにヨコナデ調整である。体部から付高台まではヘラ削りである。胎土は密で焼成も良く黒灰色を呈する。⑤は底部片で焼成が悪く風化が著しい。

軽石製支脚（第18図①、②）

竈内より大小 2 個の支脚を出土している。①は直径 8.4㎝、長さ 20.2㎝で側面に面取りの成されたものである。②は径 8.4㎝、長さ 9.8㎝、端部両面は平担で側面は多角形柱に面取りが成されている。これらは、竈の支脚として使用されたものであろう。

石　器（③、④）

敲き石（③）　石棒状の敲き石で両端に顕著な敲打痕をみることができる。また、体部中央には 3 面に楕円形状の人工的な凹みをもっている。石質は砂岩。

窪み石（④）　厚みをもつ楕円形状の窪み石であり、片面に窪みをもつ。表面には加熱を受けた状態がみられる。石質は砂岩。

第 204 号住居跡　（第19図）

位　置

201号住居跡から東に5m離れて発見され、南部集落に属する。1号溝が東に直角状に折れて7号溝となり、204号住居跡を横切る。また、南西隅寄りを北西に延びる5号溝によっても切られている。東辺部に一部後世の掘り込みをみる。

構　造

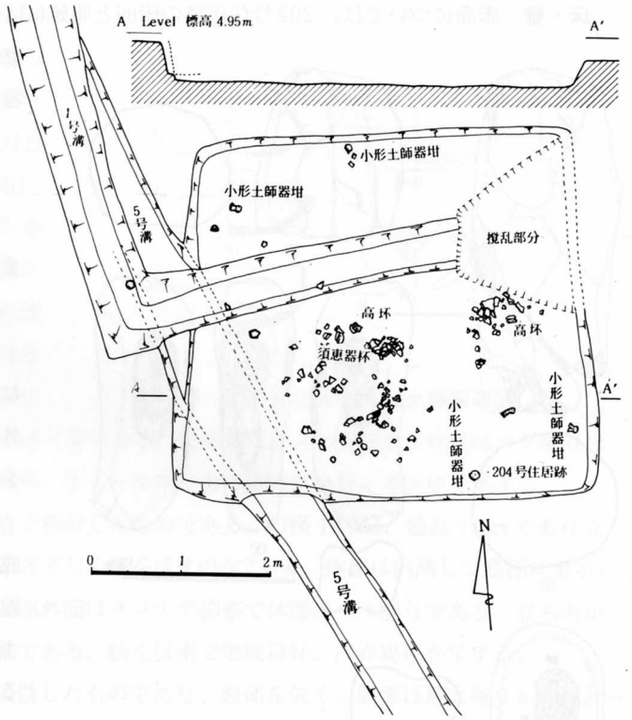
形状　方形状を呈し、隅はやや丸い

規模　北辺長4.2m、南辺長4.75m、東辺長4.15m、西辺長3.95m

主軸方位　N－6°－E

炉跡・柱穴　検出できなかった。

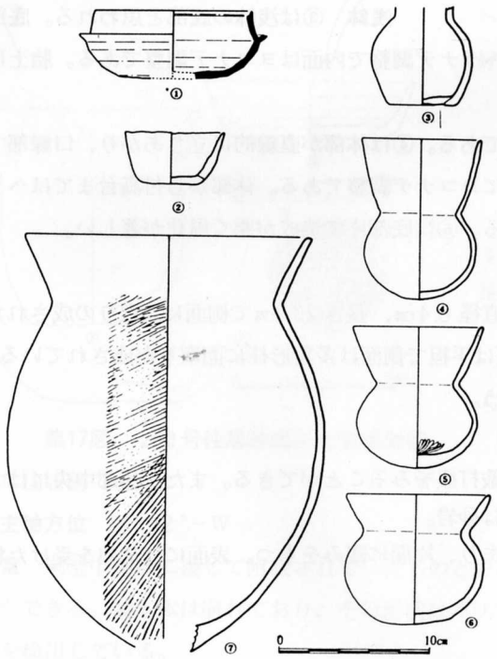
床・壁　床は平担で、あまり起伏はみられない。壁はやや内傾しており、西壁で壁高40㎝を計る。



第19図　204号住居跡実測図

出土遺物（第20図①～⑥）

完形品に近い遺物が多く出土している。特に小型土師器坩の出土は注目すべきものであった。



第20図　204号住居跡出土土器実測図

須恵器　坏（①）　住居跡中央部で出土したものである。立ちあがりが長く1.6㎝を計り、やや内傾する。端部はやや肥厚し先端部に凹みをもち尖る。受け部は立ちあがりとの境に沈線をめぐらし、張り出しが若干立ち気味である。器厚は全体的に薄く胎土は密で焼成も良好。青灰色を呈する。202号住居跡出土の須恵器坏①に類似。

土師器　坏～ミニチュア～（②）、北西隅の南、西壁寄りに出土している。体部から口縁部は直線的に開きながら立ちあがり、端部は尖る。底部は平担な平底を成す。口径6.5㎝、器高3.5㎝を計る。内外面ともに横ナデ調整である。胎土に砂粒を多く含み焼成は良好。茶褐色を呈する。

土師器　坩～ミニチュア～（③、④、⑤⑥）　③は北西隅寄りに出土しており口縁部を欠く。頸部から肩部にかけてやや張らみをもち、胴部から底部へは直線である。底部は貼り付けで平底を成す。頸部径3.8㎝、胴部最大径6.7㎝を計る。

④は南東隅寄りに出土している。口縁部は長く、内湾気味に立ちあがり、あまり開かない。頸部は締り、胴部中央が少し張らむ球形状を呈する。口径8㎝、頸部径5.3㎝、胴部最大径7.5㎝、器高10.7㎝を計る。表面は磨滅しており調整等は判断し難いが、刷毛目調整のようにも思える。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で濃赤褐色を呈する。

⑤は北壁寄り中央部に出土し、口縁部の一部を欠いている。口縁部は長く直線的に立ちあがり、④より開き気味である。頸部は締り、胴部中央が張らむ球形状を呈する。頸部径5.5㎝、胴部最大径8㎝器高9.4㎝を計る。口縁部はヨコナデ調整で胴部にはヘラ磨きがみられる。内面はヨコナデ調整。胎土に多くの砂粒を含み、焼成は良好で黄褐色を呈する。

⑥は南壁の東寄りに出土している。口縁部は短く内湾気味に外反する。頸部は締り、胴部はあまり張らまない球形状を呈し、底部がやや平担となる。口径9.5㎝、頸部7㎝、胴部最大径9.2㎝、器高8.7㎝を計る。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整で胴部外面はヘラ削り調整である。底部は粗いヘラ削りがみられる。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

土師器　甕形土器（⑦）　東壁中央部より少し内側部分から出土している。口縁部は「く」字形に外反し端部は丸い。頸部は締り、胴部の中央部で最も張らみ、底部へとしだいにすぼまる。底部は尖底を成すものと思われる。輪積み成形と思われ、口縁部はヨコナデ調整で上半胴部は平行タタキ、下半胴部から底部へは斜行タタキで調整している。内面は刷毛目調整、胎土は多くの石砂粒を含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

第205号住居跡（第21図）

位　置

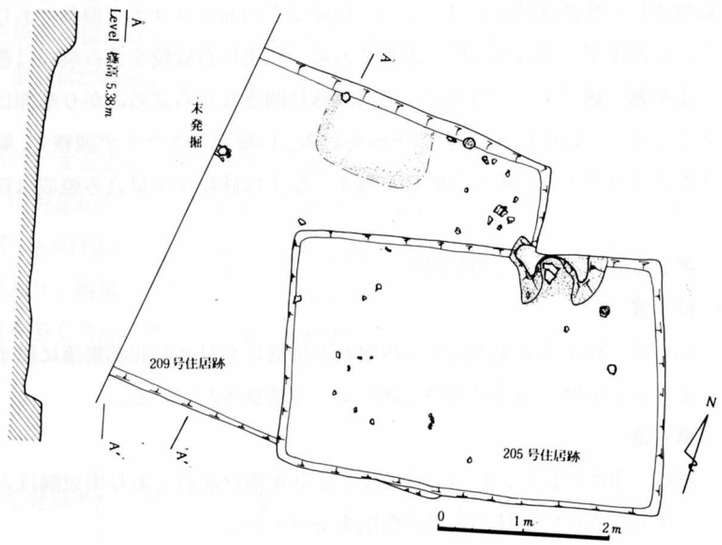
南部集落の202号住居跡の北端から約54m北の方向に平行移動した位置に発見された。この位置には209号までの5基が北部集落を形成しており、205号は209号の東半部を切っている。

構　造

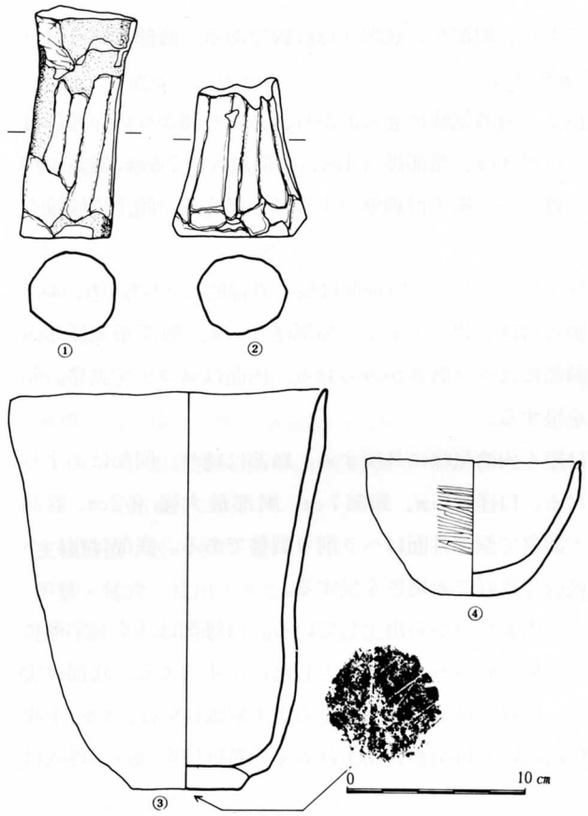
形状　北辺、南辺が長い長方形状を呈する。

規模　北辺長4.5m、南辺長3.0m、西辺長2.7m

主軸方位　N－9°－W



第21図　205号、209号住居跡実測図



第22図　205号住居跡出土遺物実測図

竈　北壁東側部分に接して附設されている。粘質土を固めて作られており一部袖をみることができる。煙道は不明である。軽石製の支脚２本を出土している。

床・壁　床は、平担であり黄褐色砂質土層を上面にしている。壁は、やや外傾しており良く残されている。壁高は30㎝を計る。

出　土　遺　物（第22図①、②、③、④）

竈から軽石製支脚を出土し、東壁寄りに土師器埦、竈近くに木葉底の甕形土器を出土している。

軽石製支脚（①、②）　①は直径 4.8 ㎝長さ 12.5㎝を計り両端が広がり平担を成す。側面は多角柱状に面取りが成されている。②は端部が折れたもので折れ口の直径は4.5㎝、基部は 7.5㎝を計る。側面は多角柱状に面取りが成されている。

土師器　甕形土器（③）　木葉底の甕形土器である口縁部は直行して開き、端部に至って少し外反する。胴部は内湾する側面と外湾する側面をもって歪化している。底部は小さい平底となる。口径 17.6 ㎝、器高 22.5 ㎝を計る。輪積成形で底部は貼り付けによる。口縁部と内面はヨコナデ調整であり、胴部外面は縦方向のヘラナデ。底部に至ってはヘラ削り調整である。胎土に石砂粒を含み焼成は普通で赤褐色を呈する。

土師器　埦（④）　口縁部は内湾気味に開きながら立ちあがり端部は尖る。底部は丸味をおびた平底を呈する。口径12㎝、器高7.6㎝を計る。口縁部はヨコナデ調整で、胴部外面は粗いヘラ磨きである。内面はヨコナデと一部ヘラ磨きを施す。胎土は砂粒を少量含み焼成は良好。濃赤褐色を呈する。

第 206 号住居跡　（第23図）

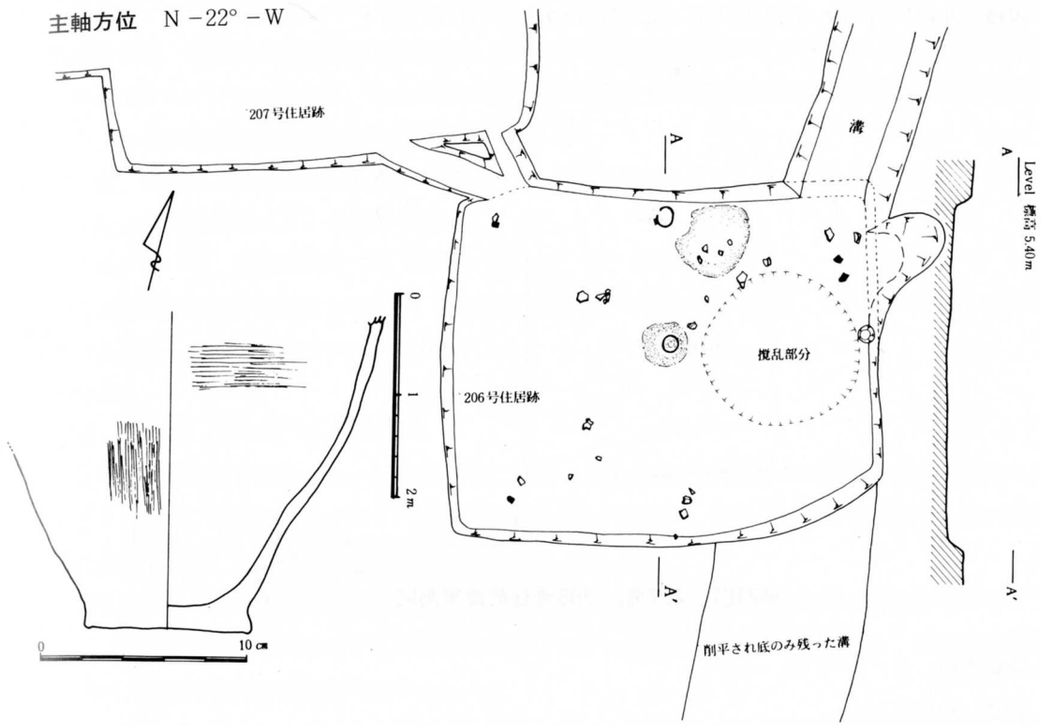
位　置

205住居跡から北東方向に３ｍ離れた位置に発見され北部集落に属する。西北は 207 号住居跡に接している。東側に南北に延びる溝を切って構築されている。

構　造

形状　東西に長い、長方形状を呈し、北東隅は崩れており南東隅は大きなカーブを成している。また、東壁寄りに円形状の後世の掘削を受けている。

規模　北壁と東壁は崩れている。北辺長約４ｍ、南辺 4.1ｍ、東辺長約 3.2ｍ、西辺長 3.3ｍ。



第23図　206号住居跡実測図（206号住居跡出土土器実測図）

炉跡　焼土が住居跡中央部と北壁に接した中央部とに検出されている。このため炉跡は２ケ所あったものと思われるが、中央部の炉跡に甕形土器が据えられており、これが主体の炉跡と考えられる。

床・壁　この住居跡は黄褐色砂層を掘り込んでおり、床面は南傾斜である。壁は外傾しており、砂質土層のため残りは良くない。壁高は22㎝を計る。

出　土　遺　物（第23図）

床面遺物は破片が散逸的であり、まとまったものは出土しなかった。

土師器　甕形土器（第23図）中央部炉跡に据えられていたもので口縁部を欠いている。胴部がやや脹らみをもち、ゆるやかに底部へとすぼまり、厚い平底と成る。底部には中央を横断する沈線が１本施されている。底部は貼り付けであり、輪積み成形である。外面は縦方向のヘラ削りであり、内面はヨコナデ調整である。胎土は石粒を多く含み、焼成は普通。黄褐色を呈する。

第 207 号住居跡（第24図）

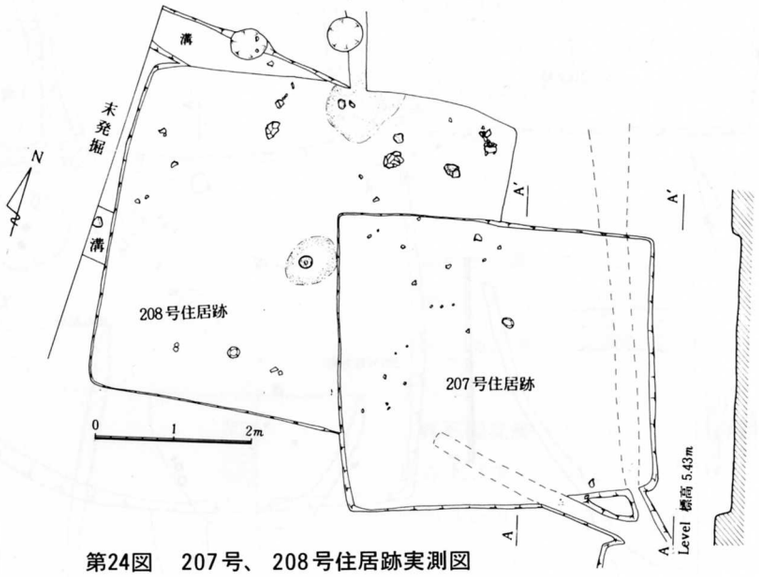
位　置

206号住居跡の北西に近接して発見され、北部集落に属する。住居跡西半は 208 号住居跡を切っている。

構　造

形状　208号住居跡を切る北東部は明確でないが方形状を呈するものと思われる。

規模　北辺長約4m、南辺長4m、東辺長3.2m、西辺長約3.3m



第24図　207号、208号住居跡実測図

主軸方位　N－19°－W

炉跡　検出されず。

床・壁　床面は208号住居跡の床面より高く検出されており平担である。壁は上部が削除を受けているため不明である。現壁高は18㎝を計る。

出　土　遺　物　床面から土師器片が出土したのみで復元可能なものはなかった。

第208号住居跡　（第24図）

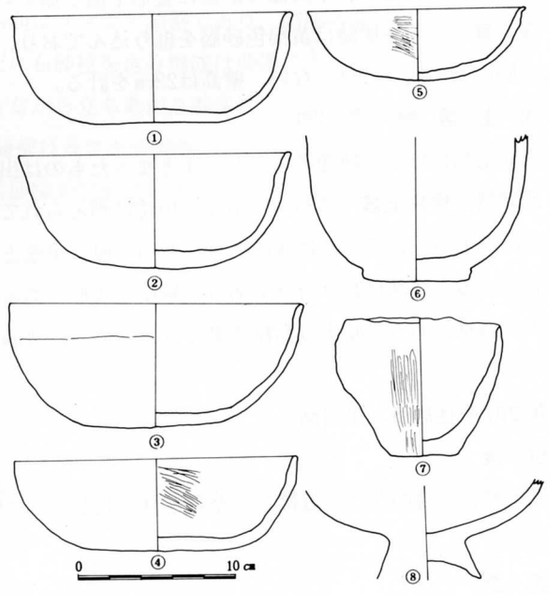
位　置

北部集落に属し、207号住居跡によって東半部を切られている。また、南方に205号、209号住居跡が近接している。

構　造

形状　207号住居跡によって東半部を切られているが方形状を呈するものと思われる。

規模　北辺長4.7m、南辺長・東辺長は計測不能、西辺長4.2m。



第25図　208号住居跡出土土器実測図

主軸方位　N－5°－W

炉跡及び竈　住居跡中央部に焼土を検出し、その中央に深鉢形土器が掘えられていた。竈は北壁中央部に附設されていたと思われ、焼土や竈に使用された粘質土及び軽石製の支脚と思われるものがみられた。かなり崩れた状態でもあり形状は不明である。

床・壁　床面は207号住居跡より若干低い位置にあり平担であった。壁は東壁と南壁の一部を残すが、北壁は溝状遺構等によって不明であった。

出　土　遺　物　（第25図①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧）

出土遺物は土師器を主体としており、須恵器片が数点含まれるのみである。特に土師器、浅鉢形土器が4点出土したことは注目すべきである。

土師器

浅鉢～（丸鉢）～（①、②、③、④）

①は中央部炉跡より出土した。口径17.8㎝、器高6.9㎝、口縁部はわずかに外反し、体部は湾曲しながら立ちあがる。底部は平担であり口縁部内外面はヨコナデ調整、体部はヘラ削り調整である。胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好で淡赤褐色を呈する。

②は北東隅より出土した。口径17.3㎝、器高7.3㎝、口縁部は直行気味で体部は湾曲しながら立ちあがる。底部は平担で器高を増す。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部は不明である。胎土は密で砂粒を含む。焼成は良好で赤褐色を呈する。

③は、②の南面に近接して出土している。口径18.6㎝、器高8㎝、口縁部は外反気味で器厚が薄くなる。体部は内湾しながら立ちあがる。底部は平担でさほど厚くはならない。口縁部はヨコナデ調整で体部は擦痕が残り、全面に煤の付着をみる。内面はヘラ磨きがみられる。胎土は密で砂粒を含み焼成は普通で茶褐色を呈する。

④は竈の南東に近接して出土した。口径17.9㎝、器高5.8㎝、口縁部は直行し、体部は内湾気味に立ちあがる。底部は平担でわずかに器厚を増し、ヘラ記号をもつ。口縁部は指頭つまみによる横引きがみられる。体部はヘラ削りで内面はヘラ磨き調整である。胎土は密で砂粒を少量含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

坏（⑤）　北東隅に出土している。口径13.8㎝、器高4.5㎝、口縁部は指頭つまみ横引きの反りがみられる。体部は内湾気味に開きながら立ちあがる。底部は丸味をおびている。口縁部はヨコナデ調整で体部はヘラ磨き。底部はヘラ切りがみられる。内面はヨコナデ、ヘラ磨きである。胎土は密で砂粒を少量含み焼成は良好で赤褐色を呈する。

深鉢（⑥）　中央部炉跡に据えられていた。口縁部と胴部の一部を欠く。胴部は脹みをもたない円筒状をなし、底部は円盤状の平底を成し木葉底である。胴部外面は調整不明、底部にかけてはヘラ削りである。内面はヨコナデ調整。胎土に石砂粒を含み焼成は不良で暗赤褐色を呈する。

埦（⑦）　竈の近くに出土している。口径9.8㎝、器高8.8㎝、口縁は内傾し端部は尖る。体部は直線的に開きながら立ちあがる。底部は小さい平底を呈する。輪積み成形であり、口縁部は指頭つまみによって粗く成形されている。外面はヘラ削りで内面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質で灰褐色を呈する。

盤（⑧）　西壁寄りに出土している。高台付きの盤であり、盤部は口縁部と体部の一部を欠く。盤底部は丸味をおびており体部から口縁部にかけては内湾気味に立ちあがるものと思われる。高台部は小さく高いものであり、裾ひろがりとなっている。高台裾部は指頭つまみによって成形されている。盤体部はヘラ削りであり、内面はヘラ研磨である。高台内面は指頭によるナデが施されている。胎土に微細砂粒を混入し、焼成は良好。黄褐色を呈する。

第209号住居跡（第21図）

位　置

北部集落に属し205号住居跡によって南東半部を切られている。北に208号住居跡が近接している。西辺部は刑務所当時の外壁が残り調査不能のため未確認である。

構　造

形状　東辺は切られ、西辺は未確認であるが北東隅の状況からは方形状を呈するものと思われる。

規模　1辺が4.2m内外を示すものと思われる。

主軸方位　N－7°－E

竈　北壁中央部に幅1.5m、長さ80㎝の焼土分布をみるため、この位置に竈が築かれていたものと思われるが既に崩れており規模は不明である。

床・壁　床面は平担でやや南に傾斜している。壁は残存部分が少ないが、外傾がみられる。壁高は20㎝を計る。

出　土　遺　物（第26図①～⑤）

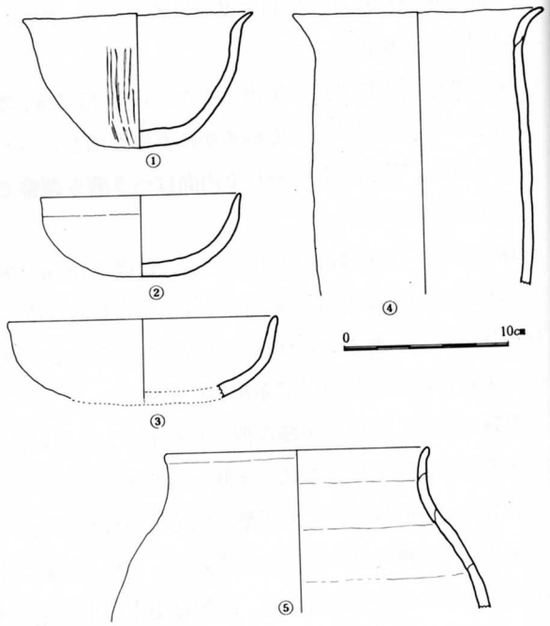
遺物は主に北壁に寄って出土している。

土師器

埦（①）　北壁に接して出土している。口縁部は外反し端部は、尖っている。体部はやや脹らみをもち、底部へすぼまる。底部は丸味をもった平底を成す。口縁部はヨコナデ、体部には擦痕がみられる。胎土は、石砂粒を含み焼成は普通で灰褐色を呈する。体部には煤の付着をみる。

坏（②）　西壁に近い位置に出土している。口径12.1㎝、器高4.9㎝、口縁部下に稜をもち端部は尖る。口縁部はヨコナデで体部及び底部はヘラ削りである。内面は横位のヘラ調整である。胎土は密で細砂粒を含み焼成は良好で淡赤褐色を呈する。

浅鉢～（丸鉢）～（③）　北壁に接して出土している。口縁部下に稜をもち端部は丸い。口縁部はヨコナデ、外面は不明。内面は粗いヘラ磨き調整である。胎土に微細粒を含み焼成は良好で黄褐色を呈する。



第26図　209号住居跡出土土器実測図

甕～（長胴甕形土器）～（④）　北東隅に近接して出土している。口縁部はゆるやかに外反し、頸部はあまり締まらない。胴部も脹らみをもたず長胴となる。輪積み成形である。口縁部はヨコナデ、胴部には擦痕がみられる。内面はヘラ調整がなされている。

壷形土器（⑤）　破砕された状態の出土であり復元不能である。口縁部は外反しながら立ちあがり端部もやや折り曲げ気味である。頸部はそれほど締まらず、肩部はしだいに張りだす。輪積み成形である。口縁部はヨコナデであり、肩部は斜め削りが施されている。胎土に石粒を多量に含み、焼成は普通で淡赤褐を呈する。

第210号住居跡　（第27図）

位　置

北部集落から南に15m離れて存在する。北側には9号溝が東西に延びている。

構　造

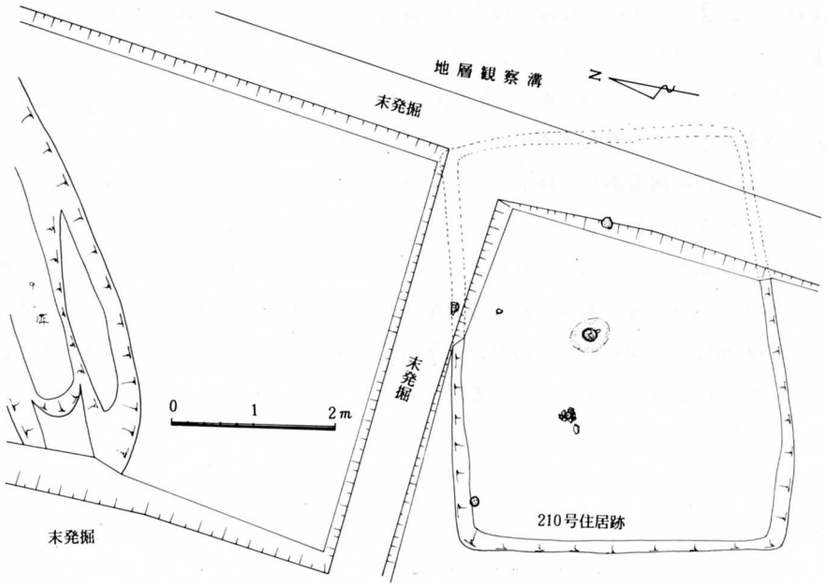
形状　東辺部は調査不能のため未確認であるが東西に長い方形状を呈するものと思われる。

規模　北辺長約4.8m、南辺長約5m、東辺長約3.5m、西辺長3.8m。

主軸方位　N－14°－E

炉跡　住居跡のほぼ中央部に口縁部を欠いた甕形土器が据えられており、周囲が焼土化していることから、これが炉跡と思われる。

床・壁　床は平担であり、わずかに西傾斜している。壁は西壁が良く残り、外傾している。壁高は25㎝内外を示す。



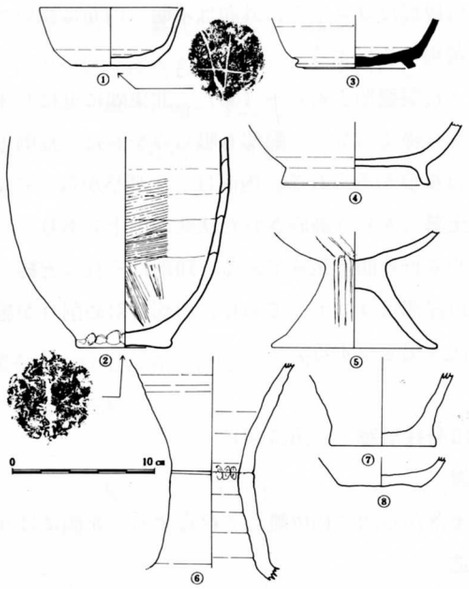
第27図　210号住居跡実測図

出　土　遺　物（第28図）

須恵器（①、③、⑥）

坏（①③）　①は北西隅より出土した。口径10㎝、器高4㎝を計る。口縁部は体部との境に稜をもち直線的に立ちあがる。ロクロ成形でヘラ切り離し、底部にヘラ記号をみる。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は微細砂粒を含み焼成は良好で淡灰褐色を呈する。

③は高台付であり口縁部を欠く。体部は直線的に立ちあがる。付高台は体底部をヘラで切り、造りだしている。ヨコナデ調整で底部はヘラ切りである。胎土に微細砂粒を含み焼成は良好で青灰色を呈する。



第28図　210号住居跡出土土器実測図

脚台（⑥）　北壁にかかって出土している。受け部の一部と脚裾部を欠いたものである。受け部と脚部とは別個につくられ、中間部でつながれている。受け部はロクロ成形、脚部は輪積み成形である。受け部は直線的に開きながら立ちあがり、脚部は同様に開き、裾部は大きく外反する。つなぎ目に2本の沈線をもつ。内外面ともヨコナデ調整である。器壁の一部に自然釉が付着している。胎土は密で砂粒を含む。焼成は良好で灰褐色を呈する。

土師器（②、④、⑤、⑦、⑧）

甕形土器（②、⑦）　②は中央部の焼土内に据えられていた甕形土器で口縁部を欠いている。胴部がやや脹らみ、底部は貼り付け状の丸底を成す木葉底である。輪積み成形であり、外面は縦方向のヘラナデ、内面は粗い刷毛目調整である。胎土に石粒を含み、焼成はやや軟質で灰褐色を呈する。胴部下に煤の付着をみる。⑦は甕形土器の底部であり、木葉底である。

椀（④）　高台付の椀であり、体部は内湾気味に立ちあがる。高台はやや開き気味に立つ。

高坏（⑤）　坏部は口縁部を欠く。底部は平たく体部はゆるやかに立ちあがるものと思われる。脚部は基部が締り裾部へ大きく開く。脚裾部は指頭によるつまみ返しがみられる。坏部、脚部ともにヘラ削りで坏内面はヘラ磨きである。胎土は微細砂粒を含み焼成は良好で淡黄褐色を呈する。

坏（⑧）　底部はヘラ切り離しであり、体部は薄く開き気味に立ちあがる。ヨコナデ調整。胎土に石砂粒を含み焼成は普通で赤褐色を呈する。

3.　溝　状　遺　構　（1号～10号溝）《別添付図》

第2次調査では、住居跡の検出とともに溝状遺構の検出もみられた。溝状遺構は、主に南部集落に伴うものと思われ北部集落においては明確な遺構検出はみられなかった。

溝状遺構の番号については、調査過程において検出された順に番号を振っている。

第1号溝状遺構

201号、202号－203号住居跡の東方に接した、南北方位（N－3°－W）に17*m*の長さで検出されている。溝幅65㎝、深さは、南部で39㎝、北部で33㎝を計る。溝底標高は北部で3.62*m*、南部で3.60*m*でありほぼ平行の底面を成す。断面はV字状を成す。南端部は東方に折れ曲がって7号溝となり、北端部も東方に折れ曲がって4号溝となる。中間部は2号溝と6号溝が切り合っている。溝内から椀等の遺物を出土している。

第2号溝状遺構

201号住居跡と202号住居跡との間の東西方位（N－100°－W）に現長6*m*で検出されたが西方になおも延長するものと思われる。溝幅70㎝、深さは1号溝と切り合う東端で16㎝、西方部では36㎝を計る。溝底標高は東方で3.92*m*、西方で3.72*m*であり、西方向に傾斜している。

第3号溝状遺構

1号溝が折れ曲がって4号溝の西端部から若干ずれる位置の南端に南北方位（N－2°－W）の掘り込みがみられる。現長は11.5*m*で北部は鈍角に東方へ折れ曲がり、そこから6*m*の地点が端部となる。溝幅60㎝、深さは南方で15㎝、北方折れ部で18㎝、端部で20㎝を計る。溝底面標高は南方で3.77*m*、北方で3.72*m*、端部で3.61*m*で北傾斜から東傾斜となる。断面はU字状を成す。

第4号溝状遺構

1号溝北端部から東方に折れ曲がった溝で東西方位（N－98°－W）に10*m*掘られて端部に至る。溝幅70㎝、深さは西方で19㎝、東方で23㎝を計る。溝底面標高は3.73*m*、東方で3.69*m*で東傾斜となる。

第5号溝状遺構

204号住居跡の南西隅を切って南北方向（N－27°－W）に現長7*m*が検出されたが、南方はなおも延びるものと思われる。溝幅80㎝、深さは北方で17㎝、南方で20㎝を計る。溝底標高は北方で3.8*m*、南方で3.81*m*の南方傾斜となっている。

第6号溝状遺構

2号溝に接して1号溝を切る状態で東西方向（N－103°－W）、に現長5*m*が検出されたが東方はなおも延びるものと思われる。溝幅75㎝、深さは西方で27㎝、東方で47㎝と深くなる。溝底標高は西方で3.75*m*、東方で3.55*m*の東傾斜となっている。

第7号溝状遺構

1号溝の南端が折れ曲がって204号住居跡を横切る溝で、東西方向（N－97°－W）に現長5*m*が検出され、東方はなおも延びるものと思われる。溝幅70㎝、深さは住居跡を切っているため不明。

第8号溝状遺構

3号溝の北方に接して、北西から南東方向（N－40°－W）に延びる。現長は8*m*で南東部は南北に

折れ曲がって2ｍほどで端部となる。北西部はなおも延びると思われる。溝幅50㎝で深さは北西部24㎝、南東部で28㎝、南端部で31㎝を計る。溝底面標高は北西部で3.74ｍ、南東部で3.67ｍの南東方向傾斜となっている。

第9号溝状遺構

210号住居跡から北方に約5ｍ程離れて検出されており205号住居跡を含む北部集落とを分ける形となっている。溝は南西方向から北東方位（N－124°－W）に延びて10号溝を切り交叉している。南西部、北東部ともになおも延びると思われる。溝幅130㎝で深さは60㎝～70㎝掘り込まれている。断面はV字状を成す。溝底標高は北東部で4.71ｍ、南西部で3.98ｍであり、南西部方向に傾斜している。

第10号溝状遺構

9号溝と交叉しており、東西方位（N－87°－W）に延びる溝である。東方部においてはやや南東方向に折れ曲がり、浅く、細くなる傾向を示している。断面はV字状を成し、溝幅100㎝で深さは約50㎝平均である。溝底面標高は東方で4.26ｍ、西方で4.13ｍであり西方向に傾斜している。

4. 溝状遺構出土遺物及びその他の出土遺物　（第29図①～⑧）

各溝状遺構から、流れ込みによる遺物がそれぞれ出土しているが若干未整理な面があるため、主なものだけを取りあげる。

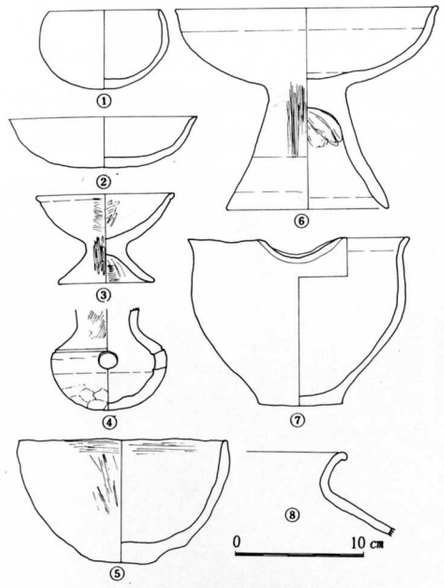
1号溝に伴う土器（①、②）　①は口径約8.6㎝、器高6.1㎝の土師器埦である。口縁部は体部との境に稜をもって内傾し、体部は内湾する。口縁部及び内面はヨコナデ、体部から底部にかけてはヘラ削りの調整である。胎土に砂粒を少量含み焼成は良好で赤褐色を呈する。②は口径14.6㎝、器高4㎝の土師器坏である。体部から口縁部へは湾曲しながら立ちあがり端部にわずかな反りをみる。口縁部はヨコナデ、体部内外面はヘラ磨きで底部はヘラ削り調整である。胎土に微細砂粒を含み焼成は良好で淡赤褐色を呈する。

9号溝に伴う土器（③、④）　③は土師器高坏である。坏部口径10.8㎝、脚部裾径7.5㎝、器高7㎝、坏は体部から口縁部へと内湾気味に立ちあがり、端部にわずかな反りをみる。脚部は基部が締り、裾部が大きく広がるもので端部の反りはない。坏部は内外面ともにヘラ磨き。脚部の基部はヘラ削り、裾部はヘラナデ、脚内面はヨコナデ調整である。胎土に少量の砂粒を含み焼成は良好で淡黄褐色を呈する。④は須恵器瓶であり頸部を欠く。肩部は強く張り、浅い沈線をめぐらしている。体部は半球状を成す。肩下部に直径1.5㎝の穿孔をみる。残存する頸部には斜行叩きがみられ、その上にヨコナデが見られる。体部はヨコナデ、底部はヘラ削り調整である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。

その他、遺構外の土器（⑤～⑧）

土師器（⑤、⑥、⑦）

鉢（⑤）　口縁部はわずかに内傾し、体部は直線的に立ちあがる。底部は厚く小さい平底を成す。口縁部はヨコナデ、胴部は粗い削り、胎土に石砂粒を含み焼成良好で赤褐色。



第29図　溝状遺構出土土器及びその他の出土土器実測図

片口鉢（⑦）　口縁部は端部近くで外反し胴部は脹らみ、底部は平底で木葉底、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り、内面ヨコナデ調整。胎土に多量の石粒を含み焼成良好。灰黒褐色

高坏（⑥）　坏部は大きく開き丸い鉢形を呈する。脚部は基部が細く、直線的に開く裾部をもつ。口縁部ヨコナデ、体部刷毛目、脚部ヘラ磨き及び刷毛目、内面ヨコナデ調整。胎土に砂粒を含み焼成は良好。黄褐色。

須恵器　甕（⑧）　大きく外反し、端部は丸くなる口縁部片である。口縁部はヨコナデ肩部は格目叩き調整である。

5. 土層観察トレンチと出土遺物

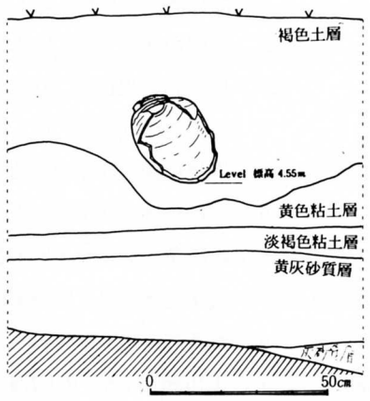
（第30、31図）

調査過程においては、南部集落と北部集落の間には当初、遺構らしきものは確認しえなかった。そこで下部土層観察のために大型掘削機（ユンボ）を用い幅1.2ｍ、長さ25ｍのトレンチを入れたところ、9号、10号溝と210住居跡の南東隅を検出した。

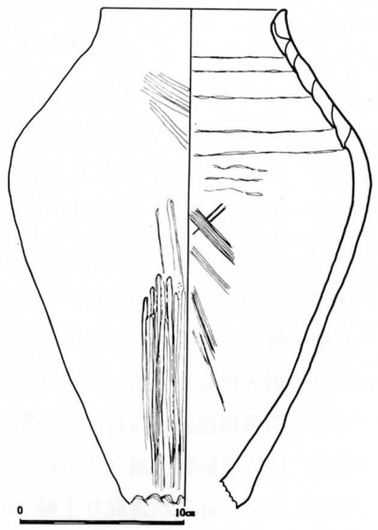
また、遺構外のセクション遺物として大型の壷形土器を発見した。土層及び出土状態は第30図に示した。

土師器壷（第31図）

頸部が強く締り、口縁部は粘土帯を1重貼付けした成形で短く立ちあがる。肩部は強く張り出し胴部は底部へと直線的にすぼむ。輪積み成形で口縁部はヨコナデ、胴部はヘラ削り。胎土は密で、少量の砂粒を含み、焼成は良好で黄褐色を呈する。



第30図　土層観察トレンチ土器出土状況

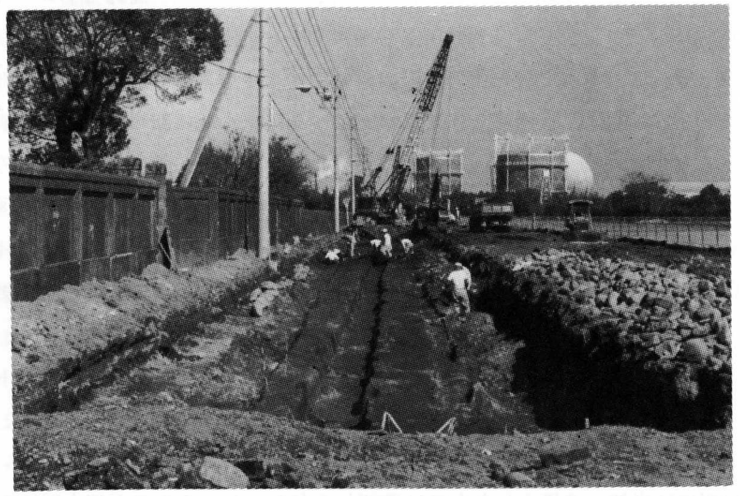


第31図　土層観察トレンチ出土土器実測図

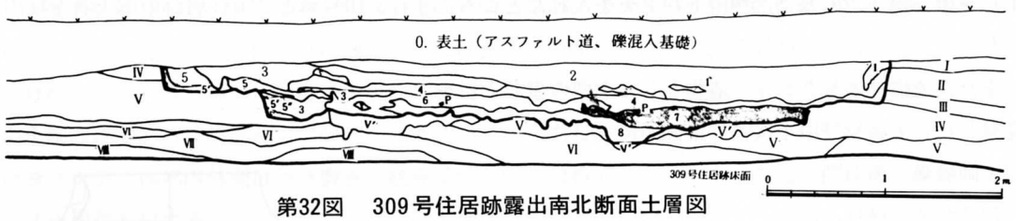
Ⅵ　第３次発掘調査

1.　層位及び住居跡内の土層推積状況（第32図）

この調査では、調査可能区域の限界にあたる西壁部において土層観察に適した層序を見い出すことができた。また、この層序には309号住居跡の１辺を横断する面も検出され、住居跡内の埋土の堆積状況をも観察することができた。層位は北側でⅠ、Ⅱ、Ⅲ層の上層が観察されるが、南側にはこの層がなく、Ⅳ層の黄褐色砂質土層が上面にきている。また、Ⅳ層からⅥ層までは共通であるが南側ではⅧ層まで観察することができる。このことから、旧地形は北側が高く、南側に傾斜していたことが推察できる。



図版７　浄土江遺跡第３次発掘調査全景



第32図　309号住居跡露出南北断面土層図

層　　位	住居跡内堆積土層
0層　表土層　（アスファルト道路）	1.　黒色層（7.5ＹＲ 2/1）
Ⅰ層　黒褐色土層（7.5ＹＲ 2/2）	2.　黒褐色層（7.5ＹＲ 2/2）
Ⅱ層　褐色粘質土層（10ＹＲ 4/4）	（2′）にぶい黄褐色層（10ＹＲ 4/3）
Ⅲ層　暗灰黄粘質土層（2.5Ｙ 4/2）	3.　暗褐色層（7.5ＹＲ 3/3）＜2′を少量混入＞
Ⅳ層　黄褐色砂質土層（10ＹＲ 4/3）	4.　黒褐色層（10ＹＲ 2/2）
Ⅴ層　暗灰黄砂質土層（2.5Ｙ 5/2）	5.　暗褐色層（10ＹＲ 3/3）＜2′をやや多く混入）
（Ⅴ′層）褐灰色砂質土層（10ＹＲ 4/1）	（5′）暗灰黄色層（2.5Ｙ 4/2）
Ⅵ層　明黄褐色砂質粘質混り土層（10ＹＲ 6/6）	（5″）黄褐色層（2.5Ｙ 5/3）
Ⅶ層　暗灰黄砂質土層（2.5Ｙ 5/2）	6.　褐色層（10ＹＲ 4/4）＜4′に2′を多量混入＞
Ⅷ層　黄褐色砂質粘質混り土層（10ＹＲ 5/6）	7.　黒色層（7.5ＹＲ 1.7/1）＜炭化物を多量混入＞
	8.　黒褐色層（2.5Ｙ 3/1）＜2′をブロック状に混入＞

（註）上記土層観察には「標準　土層帳」（監修　農林省農林水産技術会議事務所）を参考にした。

2.　住居跡と出土遺物

第301号住居跡

位置は、第２次調査によって検出した南部集落の西側部分にあたり202号住居跡に接して発見された。住居跡は南北に埋設されたガス管、水道管の掘削溝、刑務所当時の外壁の基礎等によって破壊されており、形状、規模等は不明確であるが壁及び床の一部は検出することができた。床面には焼土の分布も検出されて住居跡中央部に炉跡があったことをうかがわせる。

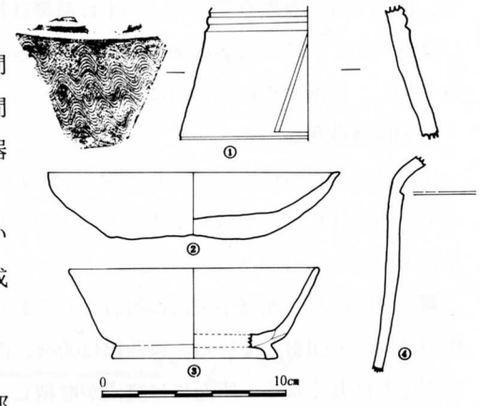
出土遺物（第33図①～須恵器。②、③、④～土師器）

器台（①）　破片であり全体的な器形は不明である。上下に稜線が見うけられる。この稜線で区分けされた間には三角形の透孔が施られている。さらにその透孔の間には櫛描波状文が施文されている。小木原古墳出土[1]の器台にその類例が認められる。

坏（②、③）　②は口径15.7㎝、器高3.4㎝の浅い坏である。口縁部はつまみナデで端部は尖る。輪積み成形で外面は粗いヘラナデ、内面はヘラ磨き調整である。胎土に微細砂粒を含み焼成は良く、淡赤褐色を呈する。

③は高台付であり、口縁部は直線的に立ちあがり端部は尖る。付高台は貼り付けであり外傾する。体部内外面はヨコナデで、高台はヘラ削りである。胎土に少量の砂粒を含み焼成は普通で赤褐色を呈する。

甕（④）　口縁部は大きく外反し、頸部において段をもつ。胴部は脹らまず直線的である。内外面ともにヨコナデ調整である。胎土に石砂粒を多く含み、焼成は良く赤褐色を呈する。胴部に煤付着。



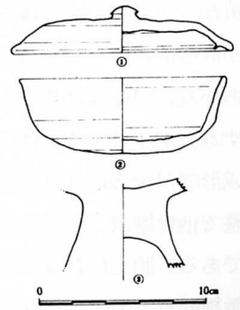
第33図　301号住居跡出土土器実測図

第302号住居跡

位置は、301号住居跡の北に接して検出され、さらに北側には307号住居跡が接している。この住居跡は床面に焼土の分布する炉跡を検出したのみで、301号住居跡と同様に形状、規模等は不明である。また出土遺物も不安定状態の出土であり詳細について割愛する。

第303号住居跡

位置は、第２次調査の北部集落の208号住居跡の北西方向にあたり南北に延びる南北溝を切って検出された。北西に306号住居跡と接し、さらに北には304号住居跡が接している。形状は方形状を呈する。主軸方位は、Ｎ－20°－Ｗ。西壁南側寄りに竈を検出している。袖部は黄色粘土質で築き固められており、中央部に甕形土器が押しつぶされた状態で出土しているが支脚はみられなかった。床面は平担であり、壁は大部分が崩壊している。規模は北辺長3.8ｍ、南辺長3.7ｍ、東辺長3.8ｍ、西辺長3.4ｍを計る。



第34図　303号住居跡出土土器実測図

出　土　遺　物（第34図①、②須恵器、③土師器）

①、②は、住居跡南西隅に接して出土したもので、身と蓋を成するものである。

坏蓋（①）　口径 13.1㎝、器高 2.8㎝を計る。口縁部内面にかえりを有し、天井部に尖り状のツマミを付す。かえりは細く広い。天井部は回転ヘラ削りで口縁部はヨコナデ、内面は刷毛目調整である。胎土に微細な砂粒を含み、焼成は良好で青灰色を呈する。

坏身（②）　口径 12.2㎝、器高 4.5㎝を計る。蓋受け部をもたず底部は平担につくられ体部から口縁部にかけては直線的に立ちあがる。ロクロ成形でヘラ切り離しによる。内面及び口縁部はヨコナデで、体部下はヘラ削りである。胎土に微細砂粒を含む。焼成は良く灰色を呈する。

高坏（③）　坏部と脚裾部を欠き基部のみを残す。基部は締り、脚裾部に開くものである。ヘラ削りを施し、内面奥部には指頭によるナデをみる。赤褐色を呈する。

第 304 号住居跡

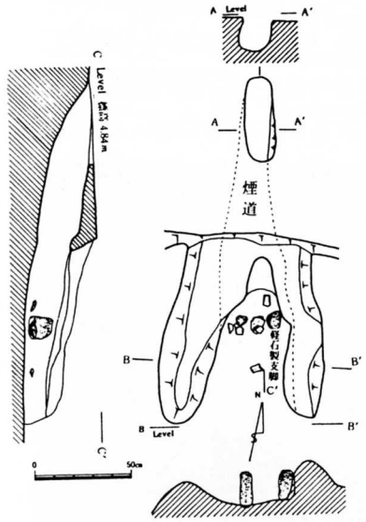
位置は、303号住居跡より北に約 5.5 *m* 離れて検出され、303号と同様に南北に延びる11号溝を切っている。形状は方形状を呈するものと思われる。規模は西壁を欠くが、ほぼ 5.5 × 5.3 *m* であろう。主軸方位はＮ－11°－Ｗ。

竈（第35図）　北壁中央部に附設されており、火袋袖部は黄色粘土で築かれていた。床面は平担で煙道に向って傾斜している。東西幅は80㎝、西側袖幅28㎝、長さ95㎝、東側袖部20㎝、長さ90㎝で両端部ともに丸くなる。床面には焼土が堆積し、その上に軽石製支脚２本が据えられていた。火袋奥部は住居跡の壁となる黒褐色土層を掘り窪めている。煙道はさらに壁を斜行に掘りぬいて住居跡の縁よりも35㎝離れた位置で短径15㎝、長径 4.3 ㎝を計る楕円形状となって開口している。

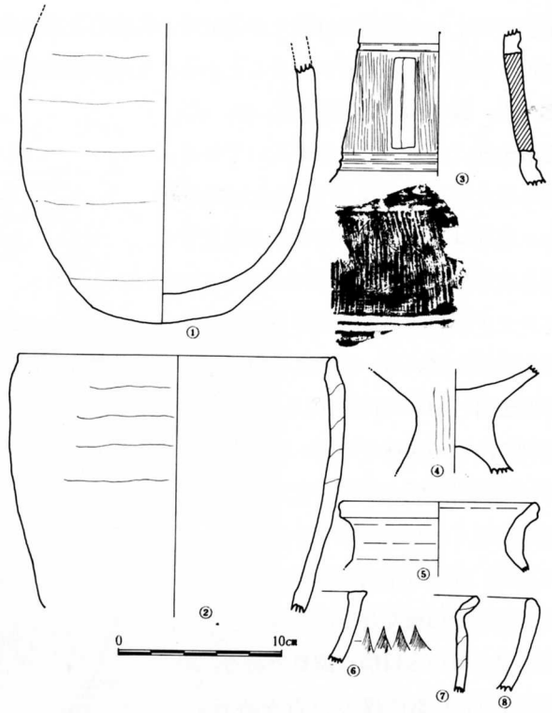
出　土　遺　物（第36図　土師器①、②、④、⑦、⑧　須恵器③、⑤、⑥）

甕形土器（①、②、⑦、⑧）　①は住居跡中央部に据えられていたもので口縁部を欠く。胴部最大径18㎝を計り内湾気味に脹らむ。底部は平底を成す。器厚は全体的に厚く底部ではさらに増す。輪積み成形で外面はヘラ削り内面はヘラナデ調整である。胴部に煤の付着をみる。胎土に砂粒を含み焼成は良好で黄褐色を呈する。②は胴部が直線的に開きながら立ちあがり、口縁部はやや内傾する。端部は尖る。輪積み成形で口縁部はヨコナデ調整で他は磨滅しており不明である。胎土に石粒を含む微細砂質で焼成は良好で淡黄褐色を呈する。⑦は口縁部が短く「く」字形に外反する。器厚は薄い輪積み成形で口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は粗い斜位削り調整である。胎土に大きな石粒を含み焼成は良好で黄褐色を呈する。

図版８　304号住居跡



第35図　304号住居跡竈実測図



第36図　304号住居跡出土土器実測図

⑧は口縁部が肥厚しやや内湾的に立ちあがり、端部は丸くなる。②に類似するものである。口縁部は内外面ともにヨコ擦痕による調整であり外面は黒く煤けている。胎土に砂粒を含み、焼成は普通で内面は淡黄褐色を呈する。

高坏（④）　坏部と脚裾部を欠く。基部は締り、脚裾部は広がる。坏底部はヘラ磨きで基部はヘラ削り調整である。胎土は石粒を含み微細砂質、焼成は良好で赤褐色を呈する。

器台（③）　破片であり全体的な器形は不明であるが、裾広がりを呈するものと思われる。上下に３本の稜線がみられ、稜線で区分された間には長方形透孔が施されており、透孔間には上下双方からの櫛状擦痕がみとめられる。胎土に微細砂粒を含み焼成は良好で濃青灰色を呈する。

壷（⑤）　頸部及び口縁部の破片である。頸部は締り直線的に立つ。口縁部は外反して端部近くで立ちあがる。内外面ともヨコナデ調整である。胎土に微細な砂粒を含み焼成は良好で黒灰色を呈する。

鉢形土器？（⑥）　口縁部のみの破片であり器形は不明。口縁部は内湾気味に開きながら立ちあがり端部は平担となる。外面に木口状によるものと思われる斜位刷毛目列が認められる。内外面はヨコナデ調整である。胎土に微砂粒を含み焼成は良好で青灰色を呈する。

第 305 号住居跡

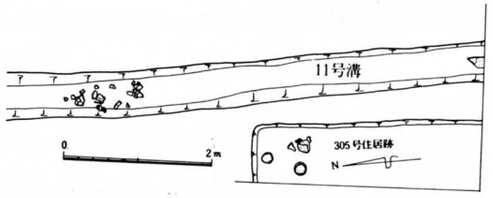
位置は 304 号住居跡の北側約 4 *m* に検出された。この住居跡は完掘することができず、北東隅を含む一部を調査したにすぎない。南北に延びる11号溝が東に接しており、形状はおそらく方形状を呈す

るものと思われるが規模、方位等は不明である。

遺物の出土した周囲には焼土が見受けられ甕形土器が床面に据えられていた。この鉢形土器には底部に川原石による添え石があることから、この位置は炉跡としての可能性が強いものと思われる。

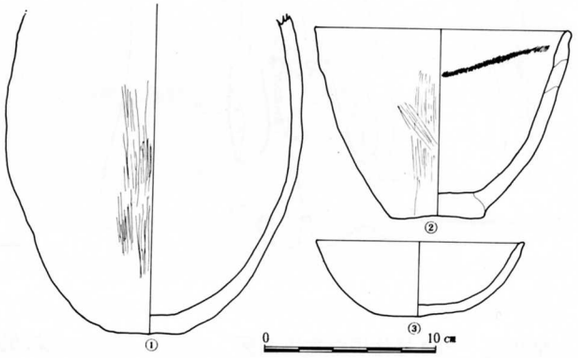
出　土　遺　物（第38図①、②、③）

甕形土器（①）　口縁部を欠いている。胴部は最大径 17.3㎝を計り内湾気味に脹らむ。底部はしだいにすぼまり丸底化する。輪積み成形で外面は縦位のヘラナデ、内面はヨコナデ調整である。胴部下位には多量の煤が付着している。胎土に石粒を含み焼成は普通で淡黄褐色を呈する。



第37図　305号住居跡、第11号溝実測図

鉢形土器（②）　口径 14.8㎝、器高11㎝を計る小形の深鉢である。胴部から口縁部は直線的に開きながら立ちあがり、口縁端部近くになってわずかに外反し端部は尖る。底部は平底で木葉底を成す。輪積み成形で口縁部及び内面はヨコナデ、外面胴部は粗い木目削り調整である。胴部及び内面上部に煤の付着をみる。胎土に石粒を含み焼成は普通で灰褐色を呈する。



第38図　305号住居跡出土土器実測図

坏（③）　口径 12.5㎝、器高 4.4㎝を計る。底部はやや丸く口縁部は直線的に開きながら立ちあがり端部は尖る。口縁部はヨコナデ、体部はヘラ磨きで内面調整は不明、底部はヘラ切りである。胎土は石質で少量の石粒を含む。焼成は良好で赤褐色を呈する。

第306号住居跡

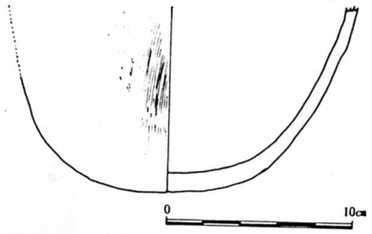
位置は303号住居跡の北東に接しているが北西隅の一部を検出したにすぎない。北西隅の状態からみて形状はおそらく方形状を呈するものと思われるが規模等については不明である。また遺物も見い出せなかった。

第307号住居跡

位置は南部にあたり302号住居跡の北側に接して検出された。住居跡は今回の調査可能区域の限界にあたる西壁部にその大部分がかかっており、完掘はできなかった。壁及び床面の一部は検出したが形状、規模等については不明である。遺物は床面に甕形土器の底部と数点の土器片がみられた。

出　土　遺　物（第39図）

甕形土器、口縁部及び胴上部を欠く。底部は平担気味の丸底を成し脹らみをもつ胴部へ立ちあがつていく。全体的に薄手の土器であり、外面には木口によるものと思われる縦位の擦痕が見うけられ内外面ともに煤が付着している。胎土に石粒及び砂粒を含み焼成は良好で茶褐色を呈する。



第39図　307号住居跡出土器実測図

第308号住居跡（図版９）

位置は301号住居跡の南側にあたり、住居跡の大部分が調査区西壁にかかっている。したがって住居跡の断面の間にかかる遺物を見い出したにすぎず形状、規模等は不明である。

図版９　308号住居跡断面遺物

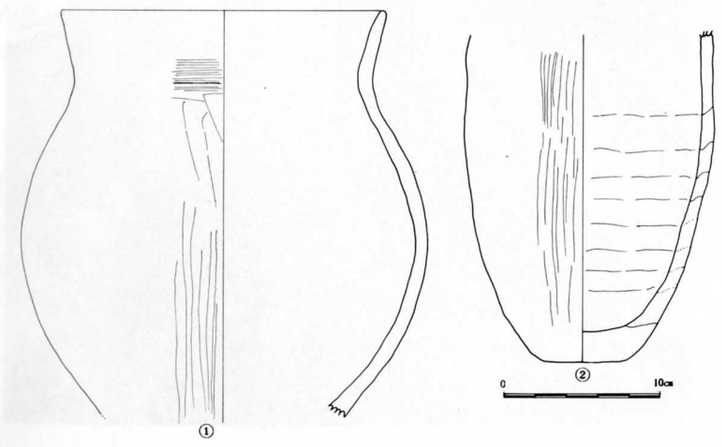
出　土　遺　物

（第40図①、②）

遺物は、いずれも住居跡の断面遺物として取り上げたものである。

甕形土器（①、②）

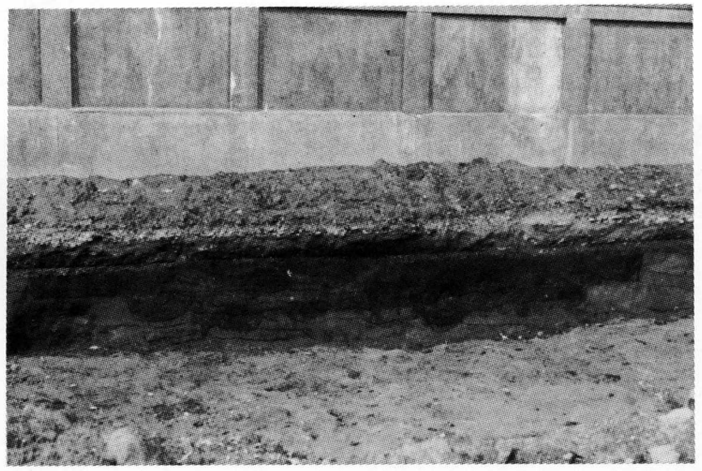
いずれも土師器である。①は口縁部の一部と底部を欠いている。口径約 20.5㎝胴部最大径26㎝。頸部が締り、口縁部は外反して端部は尖る。胴部は強く脹らみ、球形を呈する。口縁部はヨコナデ、頸部は木口面での横位ナデ、胴上部は粗いヘラ状による縦位磨き、底部はヘラ削りであり、内面はヘラ磨き調整である。胎土に微細砂粒を含み焼成は良好で黄褐色を呈する。②は口縁部を欠く長胴形の甕形土器である。胴部はわずかに脹らみ底部へは直線的にすぼむる傾向にある。底部は小さい平底を呈し、ヘラ記号が見うけられる。輪積み成形で、外面は縦位のヘラ削りで内面は斜行のヘラナデ調整である。外面は胴部下に煤が付着し、内面には炭化物が付着している。胎土に石粒を含み、焼成は良く灰褐色を呈する。



第40図　308号住居跡出土土器実測図

第309号住居跡（第32図、図版10）

位置は、308号住居跡の南にあたる。308号住居跡と同様に調査区西壁の断面に検出されたもので、形状は不明であるが規模としては1辺が6.2*m*を成すものと思われる。土層図によると床面は2重床になっている。1段目の深さについては上部が削除されているため不明であるが、現高は南壁高20㎝、北壁高40㎝を計る。2段目は床面幅4.6*m*を計る。掘り込みは1段目より南側で25㎝、北側で15㎝を計る。また、この住居跡では住居跡廃棄後の土層堆積状況を観察することができる。最初に2段目の床部分が埋まり、その後に1段目の両側壁に流れ込みがあって、逆円錘状の窪地ができ、そこに順次、埋土が堆積していったと思われる。（第32図参照。）なお、断面からの出土遺物はなかった。



図版10　309号住居跡断面

3. 溝状遺構と出土遺物

(1) 溝状遺構（別添付図。図版11）

第3次調査区では、第2次調査の際に検出された第9号、第10号溝の以北に複数の溝状遺構を検出したが、同以南においては撹乱状態が著しく、確実な溝状遺構は検出しえなかった。以北に検出した溝状遺構は南北に延びる第11号溝（南北溝）を主体とするものであった。溝状遺構の番号については、9号10号溝の延びもあることから第2次調査時のものからの通し番号を用いることにした。

第9号溝状遺構

第2次調査検出の9号溝の延長であり、形状・規模ともに同様である。傾斜は南西方向である。

図版11　9号、10号、11号溝状遺構

第10号溝状遺構

第9号溝と同様に第2次調査検出分の延長溝であり、現状、規模とも前者と同様である。

第11号溝状遺構（南北溝）

305号住居跡の東辺に接する。304号、303号住居跡を縦断して、10号溝に注ぐ南北方位（N－3°－W）の溝で現長47*m*を計るが北端はなおも延びるものと思われる。溝幅60㎝で深さは50㎝～60㎝を掘り込んでおり、断面はV字状を成す。溝底面の標高は北部で4.48*m*、303号住居跡と304号住居跡の中間で4.37*m*、10号溝に接する南部で4.20*m*を計り、南方向に傾斜している。溝と303号、304号住居跡の関係については、切り合い状態からみて溝状遺構が古く、その溝状遺構を切って新たに住居跡が構築されたものとみられる。また、この溝状遺構からは流れ込みによる遺物の出土が多く見うけられる。

第12号溝状遺構

第10号溝と交叉して、さらに北西方位（N－13°－W）へと延びる溝である。10号溝より南東に延びる溝は上部が削除され、床面のみを残している。北西方位に延びる溝は、溝幅50㎝、溝底面の標高は10号溝寄りで4.45*m*、北西部では4.42*m*で北西方位に傾斜している。

第13号溝状遺構

第11号溝の西側から平行に北西方位（N－5°－W）へと延びる溝で14号溝、15号溝と交叉する。溝幅30㎝で深さは溝上部削除のため不明である。溝底面標高は南部で4.47*m*、14号溝との接地部分で4.43*m*を計り、北西方位に傾斜している。溝は両端部ともになおも延びるものと思われる。

第14号溝状遺構

第11号溝、12号溝と交叉して東西方位（N－83°－W）に延びる溝で、両側は15号溝に交わっている。溝幅40㎝、深さは約50㎝であり、溝底面標高は東側4.16*m*、西側3.94*m*の西側傾斜となっている。西側の15号溝に交わるところでは周囲からの掘り込みがみられ、深い窪地化している。

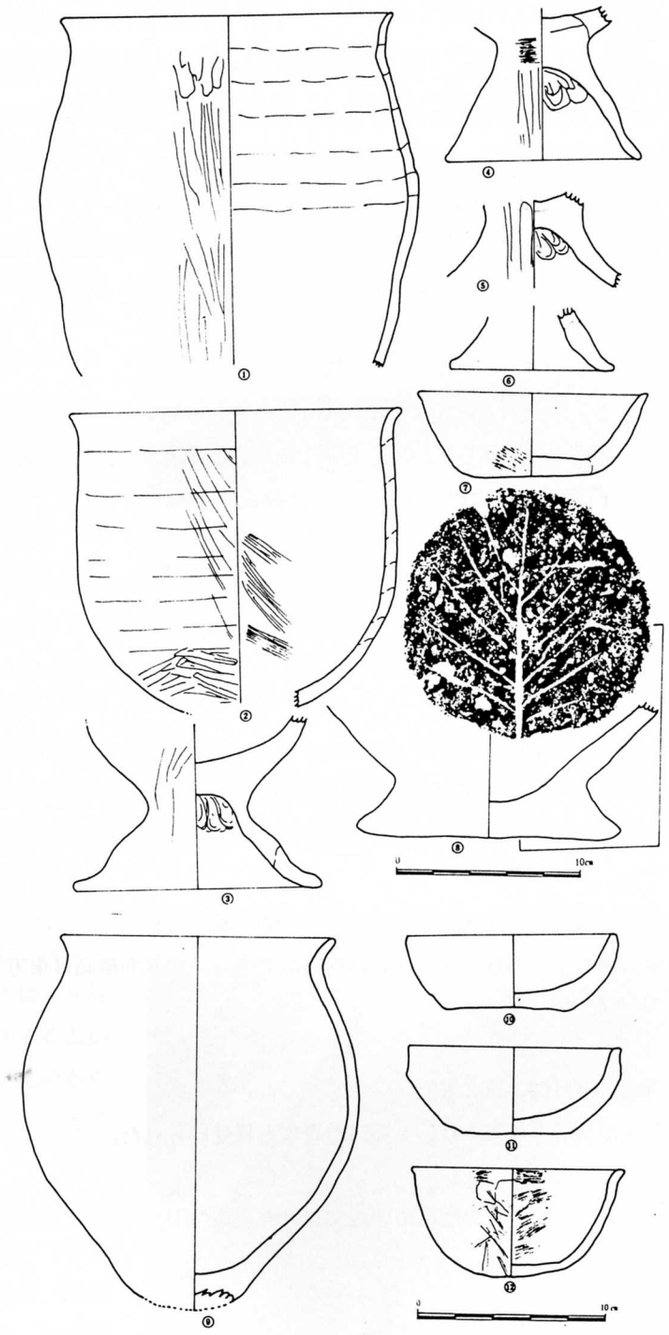
第15号溝状遺構

14号溝と同様に11号溝、12号溝と交叉し、そこからやや南に傾く方位（N－115°－W）に延びる溝で西側において14号溝と交わる。溝幅40㎝、深さは約45㎝である。溝底面標高は東方で4.39*m*、西方で4.20*m*の西傾斜となっている。

(2) 溝状遺構出土遺物（第41図、第2表）

11号溝からの出土が大部分を占めており、1部14号溝にも見受けられた。

（註）　(1)『小木原古墳』「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1)」　宮崎県教育委員会　1972



第41図　溝状遺構出土土器実測図

第2表　第3次調査　溝状遺構出土土器観察表

番号	出土地	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
1	11号溝状遺構	甕	口径 約18cm 頸部径 約17cm 胴部径 20.6cm	・頸部はわずかに締り、口縁部は短く外反する。端部は尖る。 ・胴部はゆるやかに脹らみ、歪みを見受ける。 ・器厚は全体的に薄い。	ワツミ成形 ・外面　口縁部ヨコナデ 胴部指頭のばしの後、ヘラ削り、擦痕 ・内面　斜行擦痕	焼成　良好 色調　淡黄褐色 胎土　石粒を多く含む。
2	〃	深鉢	口径 約18cm 器高 約17cm	・口縁部は長く直線的にたちあがり、端部近くでわずかに外反し、端部は丸くなる。 ・底部は丸くなる。	ワツミ成形・指頭のばし。 ・外面　口縁部ヨコナデ 胴部、斜行擦痕 底部、粗いヘラナデ ・内面　不特定方向刷毛目	焼成　良好 色調　灰褐色 胎土　石粒を多く含む。
3	〃	高坏(脚)	脚部裾径 13.5cm 脚部高 6.8cm	・脚部は基部がやや太く、内湾気味に開く。 ・裾部は大きく開いて外反する。 ・端部は尖り気味になる。	マキアゲ成形 ・脚部はハリツケによる。 ・基部はヘラ削り。 ・裾部は回転ナデ調整。	焼成　良好 色調　淡黄褐色 胎土　微細砂粒混入。
4	〃	高坏(脚)	脚部裾径 10.8cm 脚部高 7.8cm	・基部が締り、裾部は内湾気味に開く。 ・端部の反りはなく、尖る。	マキアゲ成形 基部上部はヨコナデ 裾部は粗いヘラ削り。 内面及び端部はヨコナデ	焼成　良好 色調　淡黄褐色 胎土　石粒を含む。
5	〃	高坏(脚)		・基部が太く、裾部は短く、大きく開くものである。	・基部はヘラ削り。 ・裾部内面はヨコナデ	焼成　良好 色調　赤褐色 胎土　微細砂粒混入。
6	〃	高坏(脚)	脚部裾径 9cm	・脚裾部のハリツケ部分である。 ・裾部は、やや反りをもつ	・脚部ハリツケ ・裾部は内外面ともヨコナデ	焼成　良好 色調　淡黄褐色 胎土　石粒を含む。
7	〃	坏	口径 12.6cm 器高 4.6cm	・体部から口縁部は直線的に開きながら、たちあがる。端部近くでわずかに外反し端部は尖る。 ・底部は平担である。	外面 {口縁部 ヨコナデ / 体底部 ヘラ削り} 内面 {口縁部 ヨコナデ / 体底部 粗いヘラ磨き}	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　微細砂粒
8	〃	甕底部	底部径 14.5cm	・大型の甕形土器の底部と思われる。 ・円盤形ハリツケの底部であり、木葉底をみる。	・台形状のハリツケ底部 ・木葉底 ・ナデ調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　石粒を多く含む。
9	〃	壺	口径 14.5cm 頸部径 13.5cm 器高 19.8cm	・頸部は締り、口縁部は短く外反する。 ・胴部は強く脹らみ球形状を呈する。 ・胴部から底部は、しだいにすぼまり、底部は小さく、尖り気味の丸底を呈する。	ワツミ成形 外面　口縁部　ヨコナデ 胴　部　ヘラ削り 内面　ヘラ磨き	焼成　良好 色調　黒褐色 胎土　砂粒を多く含む。 外面に多量の煤付着をみる。
10	14号溝状遺構	坏	口径 11cm 器高 3.8cm	・体部から口縁部は内湾気味にたちあがる。 ・底部は平担で、木葉底を呈する。 器厚が全体的に厚い。	外面 {口縁部 ヨコナデ / 体底部 ヘラ削り} 内面 {口縁部 ヨコナデ / 体底部 ヨコナデ}	焼成　良 色調　赤褐色 胎土　微細砂粒砂質
11	〃	坏	口径 11.2cm 器高 4.5cm	・口縁部は直線的にたちあがる。 ・口縁部から体底へは稜をもつ。 ・底部は平担となる。	外面 {口縁部 ヨコナデ / 体底部 ヘラ削り} 内面　ヨコナデ	焼成　良 色調　淡黄褐色 胎土　微細砂粒砂質
12	〃	塊	口径 11.4cm 器高 5.7cm	・体部は内湾気味にたちあがる。 ・口縁部、端部近くでわずかに外反する。 ・底部は丸味をおびる。 ・器厚は薄い。	外面 {口縁部 ヨコナデ / 体底部 ヘラ磨き} 内面 {口縁部 ヨコナデ / 体底部 ヘラ磨き}	焼成　良好 色調　赤褐色 胎土　微細砂粒

Ⅶ まとめ

浄土江遺跡の所在は、以前から知られるところであったが刑務所構内という特殊な事情から調査を行ない得ない状況にあった。ところが昭和51年6月に刑務所が宮崎市大字糸原に移転することとなったため、その再開発に先懸けて宮崎市教育委員会が主体となって発掘調査を計画し、昭和52年、昭和53年、昭和54年の3ケ年計画で実施されるはこびとなった。この調査によって古墳時代から奈良時代にかけての集落跡を発見するに至り、宮崎県においては嘗てない生活跡の発掘調査となったのである。

1. 住居跡

第1次調査においてA－2区からは3基の住居跡が検出されたが、限られた調査範囲から完掘することはできなかった。3基の住居跡は各々が切り合った状態にあり、切り合い面の観察からは101号住居跡が先行し、続いて102号住居跡、その後、102号住居跡の床面の上に103号住居跡が築かれたと判断できる。住居跡に伴う遺物は希薄であり、また出土層の明確さを欠くきらいもあって各住居跡ごとに分類することは困難な状況にあった。ただし、第5図の須恵器坏は須恵器編年のⅢBからⅤの時期に相当すると考えられることから、これらの住居跡は6世紀後葉から7世紀前葉時期に位置づけられるものと思われる。またE区においても2基（104号、105号住居跡）を検出しているがA－2区同様に完掘は行なわれておらず住居跡に伴う遺物も発見されなかった。しかし、住居跡上辺に接し、良好な状態で出土した遺物（第7図③、④）は7世紀後葉時期に比定されるものと思われることから住居跡もほぼ同時期に比定してよいのではないだろうか。F－3区では1基の住居跡（106号住居跡を検出したが、この住居跡も完掘はなされていない。この住居跡から土師器の坏、高坏の他に粗製の甕、甑、深鉢等の遺物が集積した状態で出土している。出土遺物の坏（第10図）からみて7世紀前葉に比定できるものであろう。

以上の如く第1次調査においては6基の住居跡を検出しているが、総じて限られた調査区域内での発掘であったため、形状、規模、方位等については明らかにしえない。また時期設定については、単に出土遺物の須恵器から判断したので正確さを欠く恨みはある。

第2次調査では、10基の住居跡と溝状遺構を検出しているが、これらは南部集落と北部集落に分けられ時間的にも6世紀前葉から8世紀中葉頃に比定される長い期間の生活跡であったことがうかがえる。これら住居跡の時期比定の指標となるのは南部集落に含まれる204号住居跡であるが、この住居跡からは第20図にみられるような、立ちあがりの高い須恵器坏（1）や、（7）のように弥生終末から古式土器にみられる叩きを有する甕、古式土師器に属するミニチュアの坩（③～⑥）等が共伴出土しており、古式土師器に古式の須恵器が出現する状況からみて、検出された住居跡群の中では最も先行する住居跡ではないかと思われる。そこで、この住居跡を6世紀前葉に比定し、以下後続する住居跡を6世紀代、7世紀代、8世紀代という大まかな時期設定のうえから分類してみたい。なお、第3次調査においては南部集落に西接して5基の住居跡、北部集落に西接して4基の住居跡を検出していることから、これらも含めて分類してみたい。

第Ⅰ期　（201号、202号、204号住居跡）

これらの住居跡は1辺が5m内外の正方形に近い床面を呈し、掘り込み縁辺部がかなりシャープであり壁高も40㎝から50㎝の高さをもつなどの整形性を有している。また中央部に炉跡をもち201号住居跡では炉跡中央部に長胴の甕を据えている。出土遺物をみると201号住居跡では第14図のように石器（石斧・敲き石・窪み石・石皿）を伴っていることが特徴的であり、また炉跡に使用された甕は、口縁部が短く外反し、胴部が円筒状を成すなど弥生時代にみられる甕形土器を踏襲するむきが考えられる。202号では前述した204号にみられた立ちあがりの高い坏2点と、これらを模倣した土師器の坏、また土師器の甑を出土している。204号については前述の通りである。

以上の点から各住居跡の時期を考えると204号住居跡を6世紀前葉時期に、202号住居跡を6世紀前葉から中葉時期、201号住居跡を6世紀中葉から後葉時期に比定できるものと思われ、調査区南部に集中するこれらの住居跡が浄土江遺跡においては最も先行する住居跡と考えられる。

第Ⅱ期　（206号、207号、208号、209号、210号住居跡）

これらの住居跡は短辺が3m内外、長辺が4m内外の長方形状の床面を呈するもので、掘り込みは浅く、縁辺部にもシャープさを欠いている。また炉跡は、中央部に附設するものと北壁に接して附設するものとに分けられるが中央部に附設するものの方が先行すると思われる。炉跡を中央部に附設するものには206号、208号、210号住居跡がある。なかでも206号、208号住居跡では、北壁中央部にも附設されていたが207号住居跡にだけは検出されなかった。209号住居跡では北壁中央部に附設されている。これら住居跡の構築時期は、まず210号住居跡が先行し、次いで206号、208号住居跡が構築され、その後に209号住居跡が構築されたものと考えられる。209号住居跡は、後の205号住居跡によって切られており、207号住居跡は208号住居跡を切って構築されている。時期的には、先行する210号住居跡が7世紀中葉に、最後に構築された207号住居跡が7世紀後葉に比定されるものと考えられる。

第Ⅲ期　（203号、205号、301号、303号、304号、305号住居跡）

これらの住居跡には、304号住居跡のように1辺が5mを越す大型のものから、203号住居跡のような1辺が3m弱の比較的小さな床面を成するものなど、その規模には統一性が失われてくる。また、炉跡に変って壁に接した竈が附設され始めている。遺物からみると203号住居跡では、口縁部が直線的に開きながら立ちあがり、低い付高台をもつ須恵器坏（第17図④、⑤）を伴っており301号住居跡からも203号住居跡の須恵器坏と同様の土師器坏を出土している。303号住居跡では天井部にツマミを有し、内面にかえりをもつ須恵器坏蓋と直線的に開きながら立ちあがる須恵器坏身（第34図①、②）を伴出し、304号住居跡では長方形透し孔のみられる脚台（第36図③）が伴っている。以上の出土遺物からみて、これら住居跡の時期は8世紀前葉から中葉に位置づけて良いのではないだろうか。

以上、住居跡を3期に分けて概観してきたが第Ⅰ期は204号住居跡を中心とするものであり、調査区南部に集落をもち、やや東方寄りに営まれていた。第Ⅱ期は206号、208号住居跡を中心とする集落であり、調査区北部の東方に寄って営まれている。第Ⅲ期は304号住居跡を中心とするものであり、竈の出現等もあって日常生活にも変化を与えたものと思えるが、住居跡の固定化も失われつつあって、

総体的にはばらつきが感じられるようになり、また調査区の西方へと寄る傾向がみられる。

2. 溝状遺構

第１次調査では検出されなかった。第２次調査では、１号溝～10号溝を検出しているが、これらは各々が別条の溝であるとはいえず重復の可能性が強いものである。

南部集落における各溝の関係を観察してみると、１号溝は202号住居跡の北西部に端をもち、南方に延びて201号住居跡の南側寄りで東方に折れ曲がって７号溝となっていることから、７号溝は１号溝の延長とみて良いであろう。また、この溝は掘り込みも深く断面がＶ字状を成することから、202号住居跡に伴って最も早い時期に掘られたものと思われる。２号溝は１号溝よりも底面が10㎝以上も高く西傾斜となっており、さらに201号住居跡と202号住居跡を区切るかたちとなっていることから、１号溝よりは遅れて掘られたものと思われる。３号、４号溝は同一溝と思われ、溝の掘り込みも浅くなり断面はＵ字状を呈するが、この溝も１号溝より後に掘られたものであろう。周辺に住居跡が検出されていないため住居跡との関連については言及し難い。８号溝についても同様である。９号、10号溝は、南部集落とを区切るかたちで存在する大規模な溝であるが、この溝は住居跡とは直接の関係をもたないと思われる。自然提防上における排水を考慮したものではないだろうか。また、これらの溝は９号溝の方が古く、10号溝はそれに次ぐものと考えられるが前者は早くとも７世紀代に掘り込まれたものと思われる。

第３次調査では９号、10号溝の延長溝の他に南北に長く延びる11号溝が検出されている。この溝は203号、204号住居跡を縦断するかたちで切って掘り込まれており、これらの住居跡よりも早く掘り込まれたと考えられるが南端部は10号溝に注いでいる。14号、15号溝は、11号溝と交叉しているが11号溝を切っていることからみて、11号溝の方がより古いものと思われ、第Ⅱ期の住居跡が営まれた時期に掘り込まれたものと考えられる。

3. 炉跡及び竈

浄土江遺跡の調査では、炉から竈への変遷をとらえることができる。

第Ⅰ期の住居跡では、201号住居跡にみられるような住居跡の中央部に甕形土器を据えた炉とその周囲に分布する広範な焼土が検出された。炉に使用された甕形土器は口縁部が短く「く」字形に外反し、胴部はあまり張らみをもたない長胴形を呈する。これは器表面に粗い擦痕を有するもので弥生時代終末期にもみられそうな土器である。炉は弥生時代からの引き継ぎで中央部に附設されている。

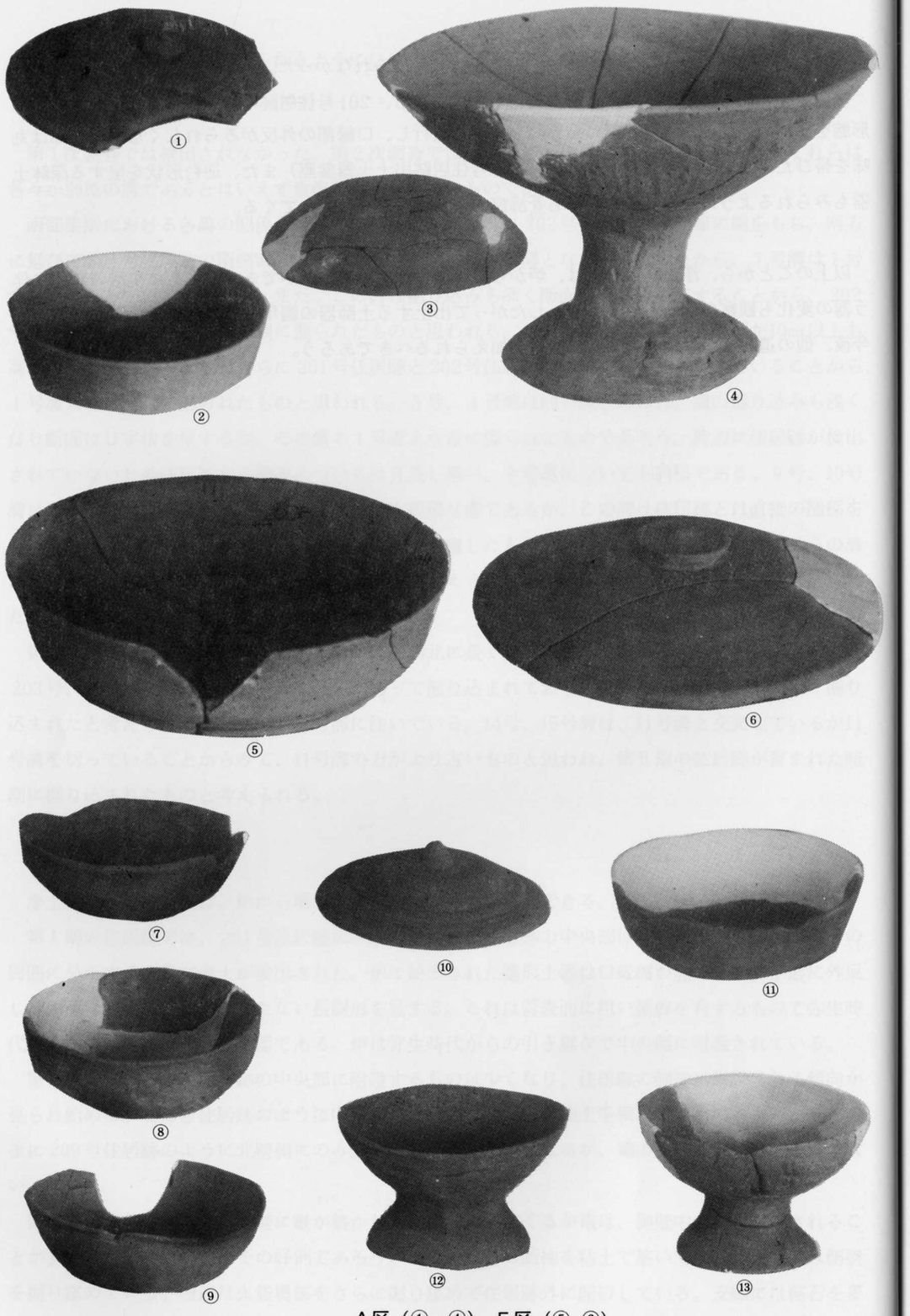
第Ⅱ期になると炉を住居跡の中央部に附設するものは少くなり、住居跡の側壁に附設される傾向が見られ始める。208号住居跡のように中央部と北壁側の２個所に焼土を検出するものもあった。その後に209号住居跡のように北壁側にのみ焼土を検出するようになるが、竈の築かれた形跡はみられない。

第Ⅲ期になるといよいよ側壁に竈が築かれるようになってくるが竈は、側壁中央部に附設されることが多い。304号住居跡がその好例であろう。竈は、焚き口両袖を粘土で築いており、火袋部は側壁を掘り窪めている。煙道は火袋奥部をさらに掘り窪めて住居跡外に開口している。支脚には軽石を多

角柱状に削ったものを使用しており、土製支脚は見受けられなかった。

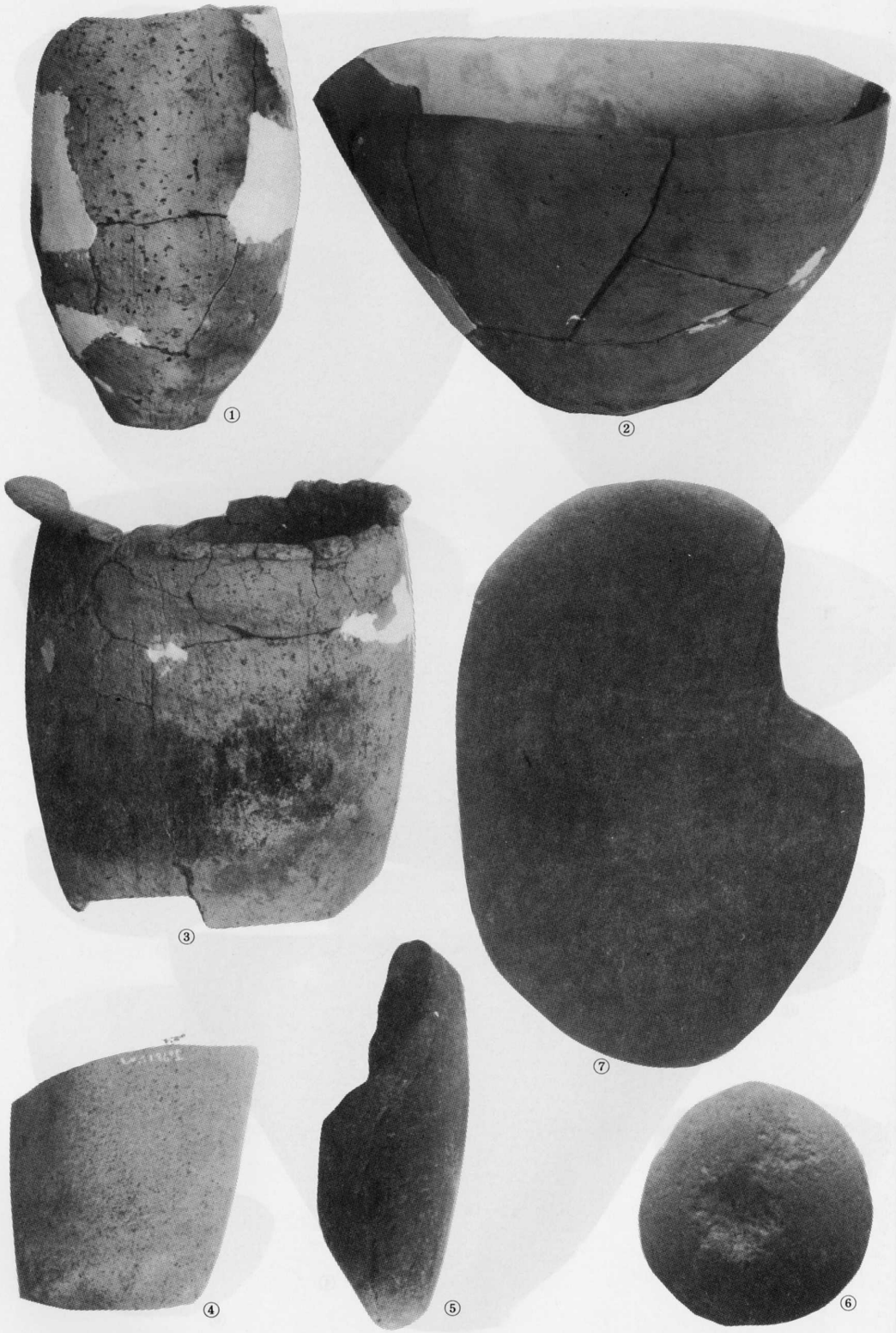
竈の出現によって使用される甕形土器にも変化が生じ、201号住居跡の炉にみられた甕形土器とは形態を異にし、胴部から口縁部は長く開きながら直行し、口縁部の外反がみられなくなる。底部は丸味を帯びた平底を呈するようになる。（205号住居跡出土土器参照）また、逆台形状を呈する深鉢土器もみられるようになり、これらにも煮沸痕がみられるようになってくる。

以上のことから、浄土江遺跡では、炉から竈への変化をみることができるとともに生活の変化に伴う器の変化も観察できるものである。したがって出土する土師器の編年、竈の形態変化等については今後、他の遺跡での事例を加味した検討が加えられるべきであろう。



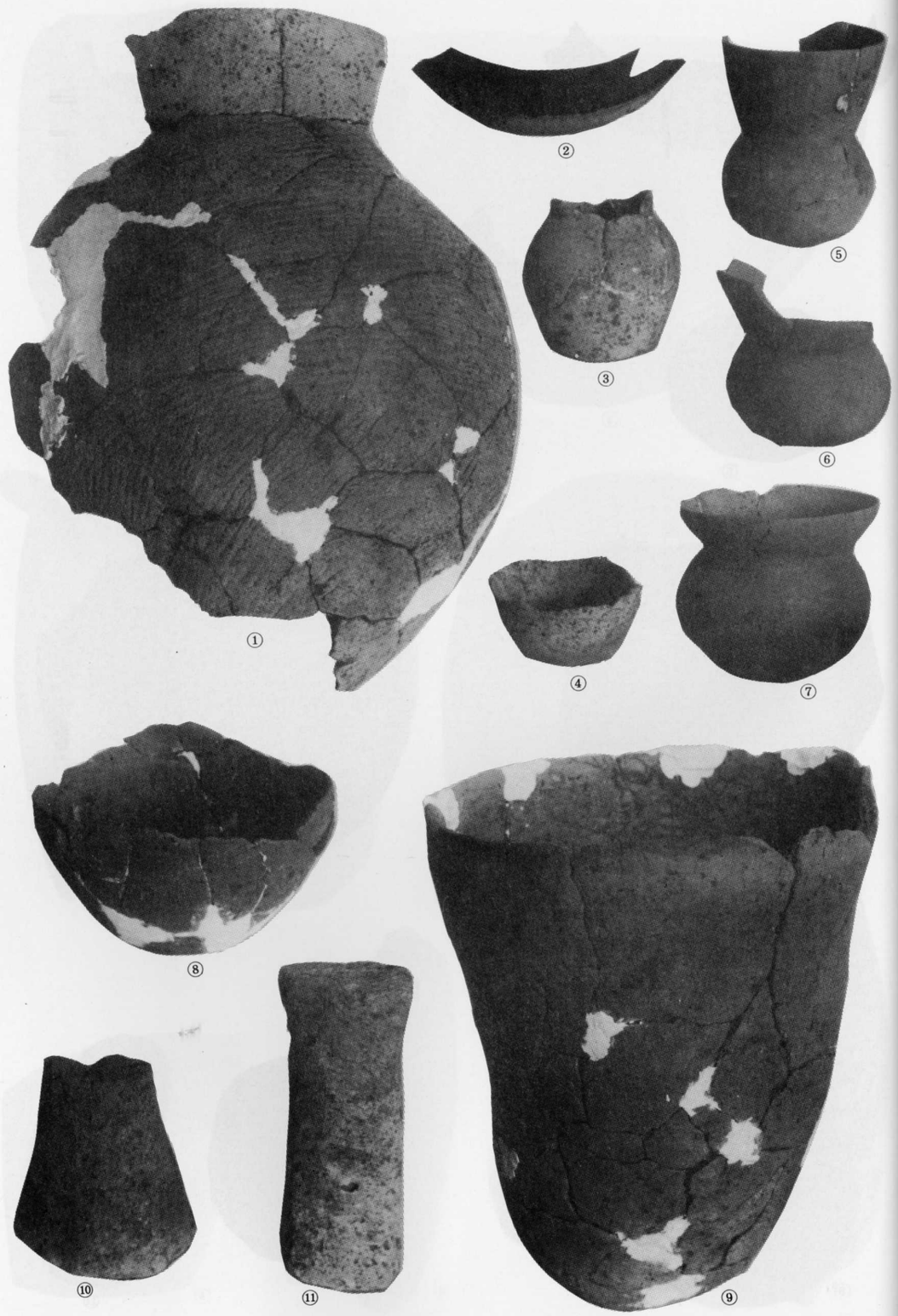
図版12　A区（①～④）、E区（⑤、⑥）
F－3区（⑦～⑬）出土遺物

図版13　F－3区（①～④）出土遺物

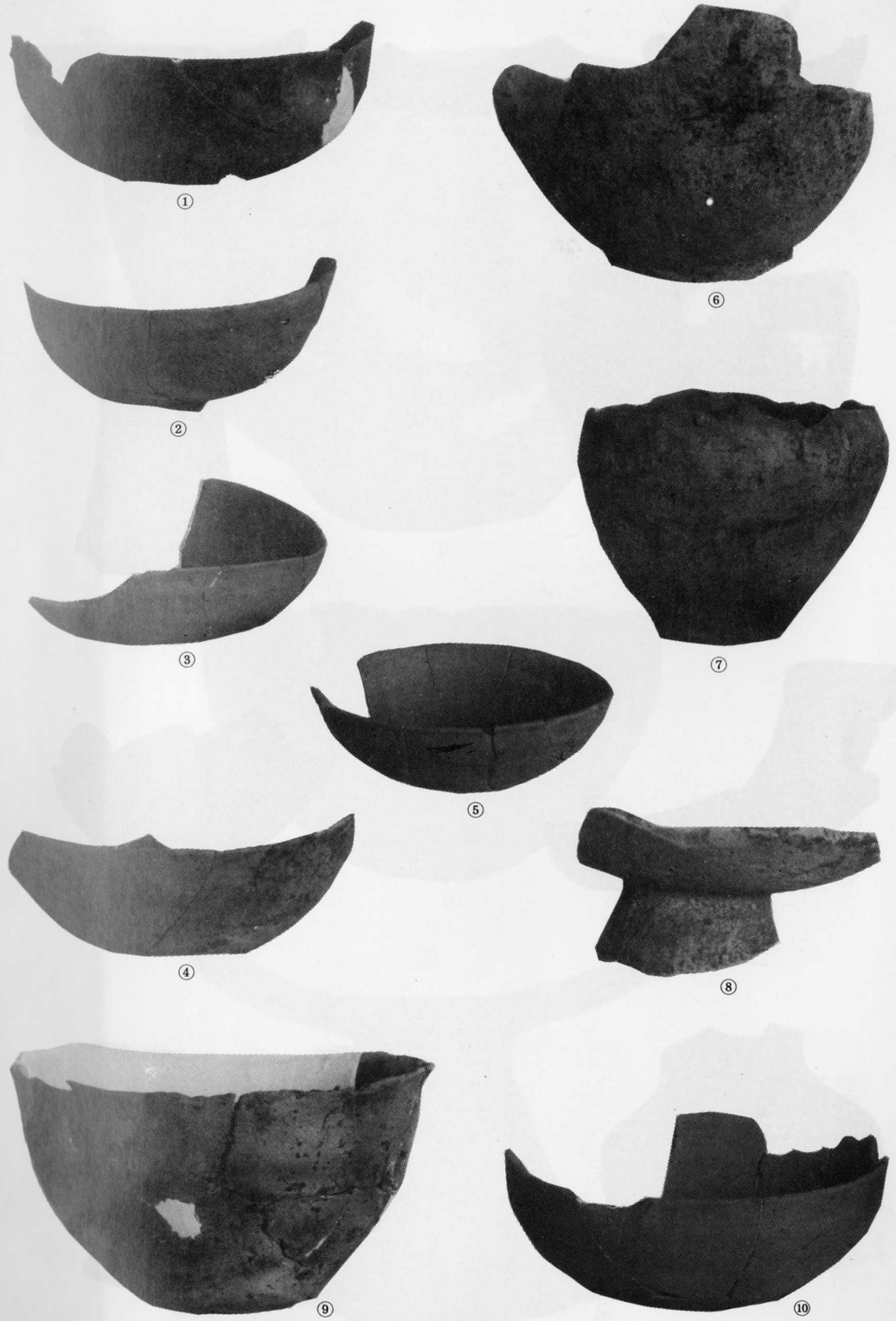


図版14　F－3区（①、②）、201号住居跡（③～⑦）出土遺物

図版15　202号住居跡（①～⑤）、203号住居跡（⑥～⑪）出土遺物



図版16　204号住居跡（①～⑦）
205号住居跡（⑧～⑪）出土遺物



図版17　208号住居跡（①～⑧）
209号住居跡（⑨、⑩）出土遺物

図版18　210住居跡（①～⑤）、1号溝（⑥、⑦）
9号溝（⑧、⑨）出土遺物

図版19　第2次調査におけるその他の出土遺物（①～③）

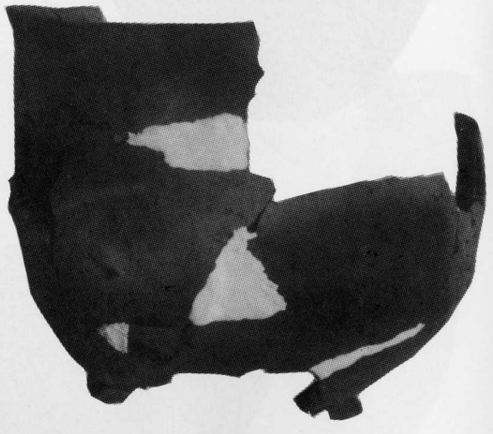
図版20　301住居跡（①～③）、303号住居跡（④、⑤）
304住居跡（⑥～⑨）出土遺物

図版21　304住居跡（①、②）305号住居跡（③～⑤）
307号住居跡（⑥）出土遺物

①

②

③



④

図版22　308号住居跡（①、②）
11号溝　（③、④）　出土遺物

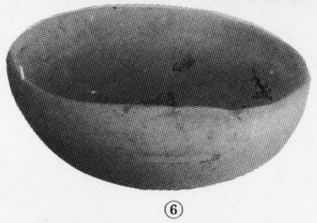
①

②

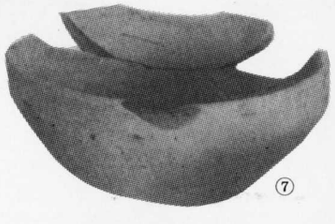
③

④

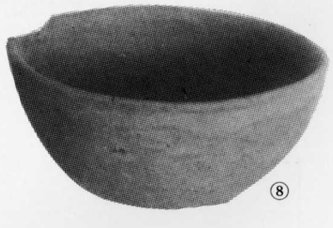
⑤



⑥



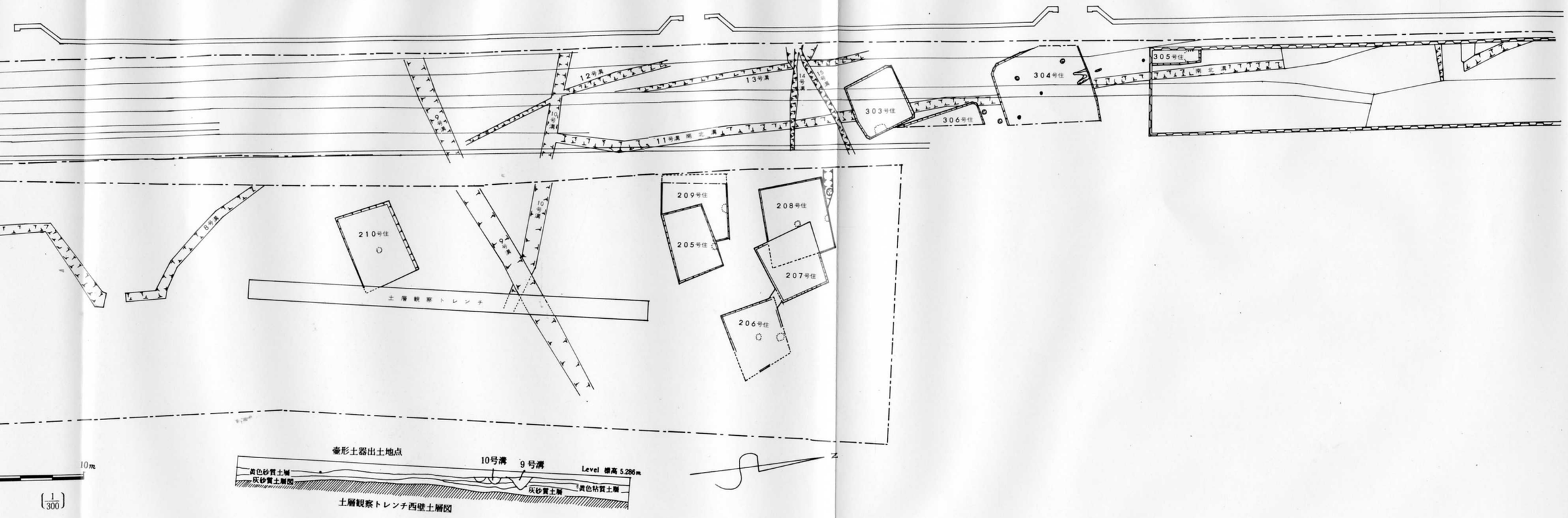
⑦



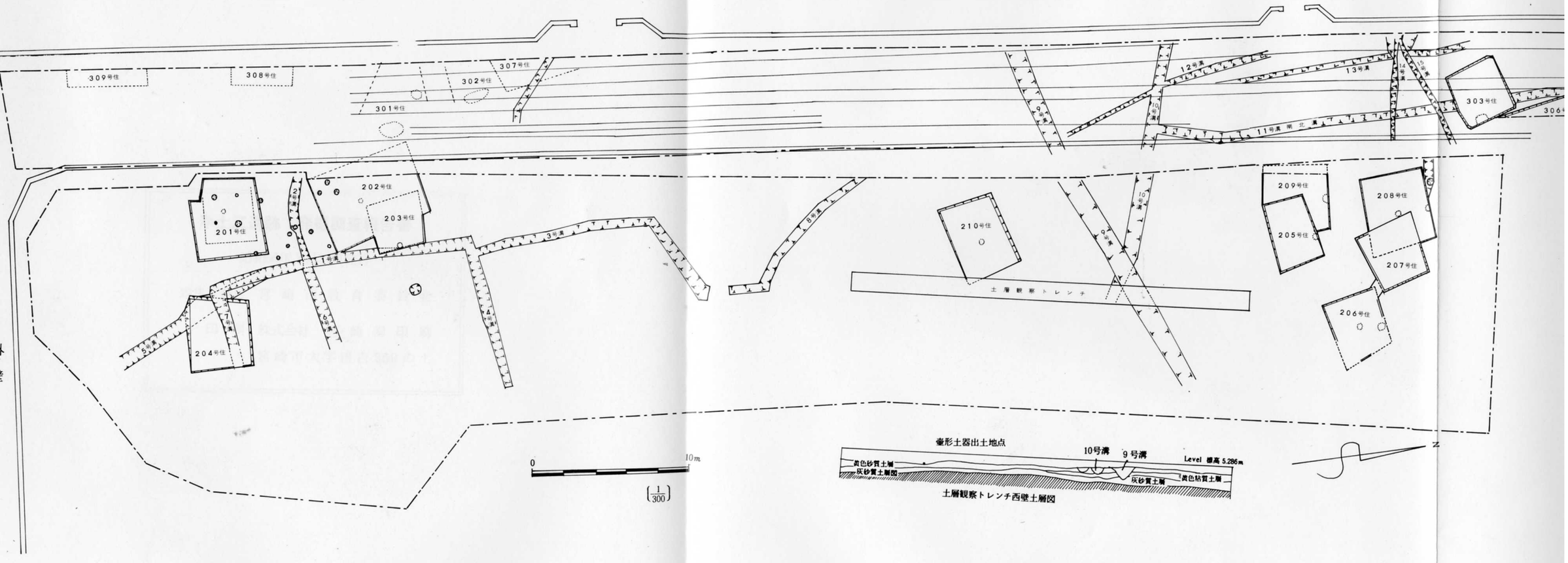
⑧

図版23　11号溝（①～⑤）
14号溝（⑥～⑧）　出土遺物

別添付図　第２次、第３次調査遺構配置図



別添付図　第２次、第３次調査遺構配置図



浄土江遺跡　発掘調査報告書

昭和56年３月31日発行

編集・発行　宮崎市教育委員会

印　刷　株式会社　宮崎南印刷
宮崎市大字田吉350の１